

19世紀初めインドにおけるウルドゥー語の正書法

山 根 聡

はじめに

小論では、ウルドゥー語の正書法の成立過程を、特に18世紀末から19世紀初めにかけての時期について考察する。これにより、「ヒンドゥスターニー語¹⁾」と呼ばれた「共通語」が、ウルドゥー語とヒンディー語という2言語に差異化された経緯も検討してみたい。

- 1) 「ヒンドゥスターニー」は「ヒンドゥスターン」の派生語である。「ヒンドゥスターン」は、ペルシア語で「インド人、黒人、奴隸」を指す「ヒンドゥー Hindū」に「国」を意味する接尾語 *stān* がついたものである。[Steingass 1892: 1514] には、Hindistān, Hindustān, Hindūstān の3種類が紹介されている。[Apte 1957: 1758-1759] は、Sindhu を語源とし、短母音の Hindu とともに、Hindū もあるとしている。一方グリアソンは『インド言語調査 *Linguistic Survey of India*』において、ペルシア詩の韻律を理由に、「ヒンドゥスターニー」ではなく、「ヒンドスターニー Hindostāni」が正しいとしている [Grierson: 42]。プラッツは「Hindustān, Hindūstān」と、u の短母音、長母音の両方を紹介しているが、「Hindostān」とはしていない [Platts 1884: 1236]。大阪外国語大学外国人招聘教員ムハンマド・ファハルル・ハク・ヌーリー博士 (Dr. Muḥammad Fakhar al-Ḥaq Nūrī) は、ペルシア詩の韻律では、*khushī* خوشی の wā'o が表記されるものの、実際には *khe* とともに計算され、*خُشِي* と同じ韻律で数えるのと同様に、Hindustan でも Hindostan でも u や o の音は短く、d とともに計算されるため、たとえ wā'o の文字が入っていても独立した音に数えないことや、ウルドゥー語の発音がアラビア語やペルシア語ほど厳格でないために、「ヒンドゥスターン」「ヒンドスターン」の両方が通用しているのではないかとの見解を述べられた。なお詩の韻律上、u を長母音化させる場合もある。詩人アーティシュ Ātish の詩句 *Ilāhī ek dil kis kis ko duḥ mainḥ hazārōḥ but haiḥ yāḥ hindūstān (hindōstān) hai* や、イクバル Iqbāl の詩句 *sāre jahān se acchā hindūstān (hindōstān) hamārā ham bulbulēḥ haiḥ is kī yeh gulistān hamārā* がそれであり、長母音 ū による「ヒンドゥスターン/ヒンドスターン」が例外的に扱われる。また [Quraishi 1997: 20] には、1857年のインド大反乱の翌年、大反乱の諸要因に関するエッセイを記したサイイド・アフマド・ハーン (Sar Saiyid Aḥmad Khān) の手書き原稿が掲載されているが、そこには Hindūstān, Murādābād, Khān など、長母音の上に短い縦線の発音区別記号が付されている。この場合「ヒンドゥスターン」となり、当時そう発音されていたと推定される。小論では短母音 u の「ヒンドゥスターン」で表記する。なお「ヒンドゥスターン」の英語表記は、Hindoostaan と Hindustan の2種があるが、前者は、19世紀初めのギルクリストによる転写法に基づいたもので、∞ は短母音の u、a は長母音の ā、ee は長母音の ī であることから、カタカナで書く場合は「ヒンドゥスターニー」となる。後者は19世紀半ば頃には定着した表記である。

ウルドゥー語はヒンディー語同様、インド・ヨーロッパ語族のインド・アリア語派に属する。デリー近郊の口語カーリー・ボーリー (Kharī Boli)²⁾ から発達したとされる両言語の差異を規定する根拠はない。藤井：78が指摘するように、「ペルシア=アラビア文字で記述すればウルドゥー語、デーヴァナーガリー文字を用いればヒンディー語というような分化が顕わとなっていた」³⁾ には、イギリスによる言語政策が大きくかかわっている。イギリス東インド会社が1800年にカルカッタに設置したイギリス人向けの現地語教育機関フォート・ウィリアム・カレッジ (Fort William College) においても、その初期段階ではヒンディー語とウルドゥー語の区別がなく、二つをあわせて「ヒンドゥスターニー語 Hindoostanee」としていたが、「この分化が、ヒンドゥー教とイスラーム教と不可分に結びつくまで、さほどのときは要さなかった」[藤井：78]。19世紀末には「ヒンドゥスターニー語、もしくはウルドゥー語 (Hindoostanee or Urdu)」[Platts 1909] といった表現によって、ヒンドゥスターニー語とウルドゥー語は同一視されていった³⁾。

「共通語」としてのヒンドゥスターニー語はいつ確立されたのであろうか。また、ひとたび「共通語」として成立したはずのヒンドゥスターニー語が、いかにしてウルドゥー語とヒンディー語に分化したのだろうか。先行研究では、Brass 1974, Robinson 1974, King 1994のように、両言語と宗教の結びつきについて、19世紀半ば以降の政治的背景を、主に英語の資料に基づいて論じたものが多い。一方言語面での研究では、ウルドゥー語とヒン

2) 「カーリー・ボーリー」はデリーやメーラト近郊地域の口語を指すが、この呼称がいつから用いられてかは定かでない。フォート・ウィリアム・カレッジのヒンドゥスターニー語教授ギルクリスト (後述) が6回、同カレッジでデーヴァナーガリー文字での文学作品を執筆したラッルー・ジー・ラール (Lallū Jī Lāl) が2回、サダル・ミシュラが2回用いたと紹介している [*Hindī Sāhitya Kosh I*; page 249–251]。これについてフォート・ウィリアム・カレッジの報告書には、カーリー・ボーリーについて k, hree Bolee, or Hinduvee として、ヒンダヴィーと同義と位置づけている。カーリー・ボーリーの出版物としてミシュラによるブラジ・バーシャー (語) で書かれた *Prem Sagar* を、ギルクリストの強い要望で、ラッルー・ジー・ラールがカーリー・ボーリーに翻訳し、1810年に Hindoostanee Press から刊行されたとある [AFW: 28]。1814年には、*Prem Sagar* をもとにしたカーリー・ボーリーと英語の語彙集 *A Vocabulary, K, huree Boli and English, of the Principal Words Occuring in the Prem Sagar* が同カレッジのサンスクリットとベンガリー語の助教授 Lieut. William Price によって刊行されている [AFW: 28]。

3) なお雑誌『印度洋』で、小川英二は「印度語」に「ヒンドスタニー」とルビを振り、「印度語と云ふ場合、之がヒンドスタニーのみを指示するものでないことは明白な事実である、が此の一文に於ては総てヒンドスタニーを指示するものと解釈して頂き度い」とことわり [小川 1933: 32]、「ウルデウ (Urdu Language) 即 Persianized Hindūstāni が…(中略) 一般に「文学語」として認められるに至つたのは、第十六世紀の後半であつた。爾來第十九世紀の初期に於て印度の Lingua Franca と提唱されるに至つた過程は、欧州言語学研究生徒の熾烈な研究によるものであつて、さなくば幾多の種族、言語分布を有する印度にあつては、或は一種族の方言としての生命を維持するにすぎないものとなつていたかも知れないのである」[小川 1933: 32–33] と記している。小川は東京外国語学校ヒンドスタニー語科卒業生で、当時外交官であつたと思われる。

ディー語の差異化の要因を、ペルシア＝アラビア文字で記述すればウルドゥー語とする、使用文字によって言語名を規定する主張 [Kidwai]⁴⁾ や、語彙におけるアラビア語、ペルシア語系語彙利用の多寡の差とする見解 [Dihlavi 1987: 794; Ray 1984: 34-35; 251; Aqeel 1994] などが挙げられている⁵⁾が、小論では、文字や語彙の違い以外の要素を提示したい⁶⁾。

イギリス人によるウルドゥー語とヒンディー語の差異化は、彼らがインドの諸言語を「発見」し、西洋の記述文法という文脈で現地語を理解しようとした所産にほかならない。そこで、18 世紀末から 19 世紀初めにかけての、ギルクリスト (John Borthwick Gilchrist, 1759-1841)⁷⁾ などイギリス人ら文法学者による「共通語」としてのヒンドゥスターニー語

- 4) 19 世紀初めの文人インシャー (Inshā Allāh Khān Inshā) による散文『ケータキー姫物語 *Rāni Ketki ki Kahāni*』は、アラビア語、ペルシア語、トルコ語などの外来語を一切排除しながらも、ペルシア＝アラビア文字で記した散文として知られる。この作品をヒンディー文学史ではヒンディー語最初の散文作品とする一方、ウルドゥー文学史では技巧に凝ったウルドゥー詩人による座興 [Shackle & Snell: 2; 89] と評価している。このように、使用文字による言語名特定は困難である。なお『ケータキー姫物語』にはペルシア語接頭辞 *be* が *be-ghar* (家なし) として見られる。インシャーが *be* をペルシア語と認識していなかったのか、あるいは *ghar* とつながることでペルシア語でなくなったと理解していたかは不明である。
- 5) サンスクリット系語彙を「多用」すればヒンディー語、アラビア語、ペルシア語を多用すればウルドゥー語との一般的な説は存在する。[Aqeel 1994: 201] は、スーフィーが口語の表記にペルシア文字を選択したことで、アラビア語やペルシア語の語彙や文体をウルドゥー語に取り込むことに成功したとしている。サイイド・アフマド Maulavi Saiyad Aḥmad Dihlavi 編纂によって、1901 年に刊行されたデリーの語彙を中心にした 4 巻本のウルドゥー語辞書 *Farhang-e Āṣifiya* の巻末には、収載語総数 54,009 語のうち、パンジャービー語を含むヒンディー語が 21,644 語、ウルドゥー語 (Dihlavi によると、外来語でヒンディーに入ったものと定義している) が 17,505 語、アラビア語 7,584 語、ペルシア語 (イランのペルシア語およびインドのペルシア語を含むとして) 6,041 語、サンスクリット語 554 語、英語 500 語、その他 (トルコ語 105 語、ギリシア語 29 語、ポルトガル語 16 語、ヘブライ語 11 語、スリヤーニー (Suriyāni) 語 7 語、ローマ語 4 語、フランス語 3 語、バラハマー (Barahamā) 語 2 語、マラーバル語 1 語、スペイン語 1 語) 181 語と記されている [Dihlavi, 1987: 794]。ウルドゥー語とアラビア語、ペルシア語、トルコ語語彙の合計は 31,235 語となり、これが辞書全体の語彙数の半数を上回っており、ウルドゥー語を特徴づけている。だが外来語彙の割合は言及されていない。
- 6) 先行研究では、文法書編纂の背景や文学史上の意義を論じたものはあるが、正字法確定の根拠や、小文で触れる転写作業の意味についてはほとんど触れられていない。
- 7) エジンバラ生まれ。1782 年に渡印、東インド会社の外科助手として就職する。1985 年にヒンドゥスターニー語を独力で学ぶ目的で 1 年の休暇を願い出、ファターガル、ファイザーバード、ガーズィープールなど北インド各地を廻る。1787 年から 1795 年までのガーズィープール滞在中、インディゴ栽培とともに辞書編纂作業も手がける。1798 年、イギリス東インド会社はギルクリストをヒンドゥスターニー語の専門家と認め、1799 年 1 月には、ベンガル総督ウェルズリーの命により、若手官吏 (Junior Civil Servants) 向けの語学学校 Oriental Seminary でヒンドゥスターニー語を教える。1800 年にフォート・ウィリアム・カレッジのヒンドゥスターニー語科教授に就任、同カレッジで多くの文学作品などを教材として刊行させた。1804 年にイギリスに帰国し、1809 年にイギリス東インド会社を定年退職した。その後ロンドン市内の Oriental Institution でヒンドゥスターニー語を一時的に教えたが、その後パリで亡くなった [DNB: 1221]。著作に、*A Dictionary, English and Hindoostanee, 2 Parts*, (Calcutta, 1787-90); *A Grammar of the Hindoostanee Language; with a Supplement* (Calcutta, 1796); *The Oriental Linguist* (Calcut-

の記述文法の編纂過程と、正書法について考察する。

I 言語名としての「ヒンドゥスターニー」と「ウルドゥー」

1 ヒンドゥスターニー語

言語名としての「ヒンドゥスターニー」がいつ、誰によって用いられたか確かではない。『バーブル・ナーマ』には、カーブル地方で話されている言語を紹介する中で、「ヒンディー語」が挙げられている [間野：206]。この場合の「ヒンディー」とは「インド人」のことであり [近藤 2003：500]，zabān-i Hindī とは、「インド人の言語」を指す。また同書には「ヒンドゥスターン語⁸⁾」 [間野：420]，「ヒンド語⁹⁾」という言語名はあるが、「ヒンドゥスターン」に語尾 i をつけて言語名とする表現はない。一般に、「ヒンドゥスターニー」はイギリス人らヨーロッパ人がつけたといわれる [Jain：49] が、この確証もない¹⁰⁾。

18世紀半ば、インドを訪問したヨーロッパ人は、インドで話されている言語を「インドスターン語 / インドスターニー / ヒンドゥスターン語 / ヒンドゥスターニー / ヒンドス

ta, 1798); *The Antijargonist or a Short Introduction to the Hindoostanee Language* (Calcutta, 1800); *Hindoostānee Philology: Comprising a Dictionary, English and Hindoostānee, also Hindoostanee and English; with a Grammatical Introduction* (Edinburgh 1801); *The Hindee Story Teller or Entertaining Expositor of the Roman, Persian, and Nagree Characters, Simple and Compound, in Their Application to the Hindoostanee Language, as a Written and Literary Vehicle*. (1803) Calcutta: Hindoostānee Press; *Hindee Moral Precepter*, (Calcutta 1803); *Hidayat ool Islam in Arabic and Hindoostanee* (Calcutta, 1804); *The Antijargonist, Stranger's Guide, Oriental Linguist* (Edinburgh, 1806); *The Hindee-Roman Orthoepigraphical Ultimatum* (London, 1820); *Dialogues, English and Hindoostanee: for Illustrating the Grammatical Principles of the Stranger's East Indian Guide* (London 1826) などがある。

8) zabān-i hindustān か。

9) zabān-i hind か。

10) [藤井 66] は、ヒンドゥスターニーという言語名が、在来の用語法か、イギリスをはじめとするヨーロッパ諸勢力の創出かについては史料で検証できていないとする。プラッツの辞書には、「ヒンドゥスターニー」が北インドをあらわす「ヒンドゥスターンの言語」であるのに、一般に「ウルドゥー語」と間違っ (mistakenly) 適用されている [Platts 1884: 1236]、としている。またプラッツ自身は 1909 年に記した文法書で Hindustani と Urdu を同一視している [Platts: 2002]。プラッツにやや遅れるグリヤソンは、『インド言語調査 *Linguistic Survey of India*』において、西部ヒンディー語 Western Hindi の方言 dialects として、Hindustani, Bangaru, Braj Bhakha, Kanauji を挙げ、Hindustani が、西部ローヘルカンド Rohilkhand からガンジス川上流ドーアープ地域 Doab, パンジャープのアンバラ Ambala の範囲で話されているとしている。さらにグリヤソンは、ウルドゥー語とは、ムスリムと、ムスリムの教育制度を受容したヒンドゥーによって用いられる言語であり、ヒンディー語とはヒンドゥーの教育制度で教育を受けたヒンドゥーによってのみ用いられる言語と規定している [Grierson: 1]。文字に関しては、一部でペルシア=アラビア文字が用いられ、他の方言ではデーヴェナーガリー文字が用いられるとし、文法については全ての西部ヒンディー語の標準としている [Grierson: 3]。

ターニー (Indostan Language/Indostani/Hindoostan Language/Hindstani/Hindstani) 等と呼んだ¹¹⁾。この「ヒンドゥスターン」とは、バナーラスと、インダス川に交わるサトルジ川 (Satlj) に挟まれた地域、あるいはインド亜大陸の住民を指すペルシア語「ヒンド Hind」¹²⁾ にペルシア語の接尾語「～の国 stān」がついた地名で、これに i がついた派生語「ヒンドゥスターニー」ができた¹³⁾。この言語名については、宗教との関連から、非ムスリムが用いる場合は「ジェントゥー Gentoo」[藤井：66]¹⁴⁾、ムスリムが用いる場合は「ムーア Moor」と呼ぶこともあった¹⁵⁾。

「インド」がインド亜大陸全体とインダス川流域を指す両義性を持ったように、「ヒンドゥスターン」という語もまた、広義ではインド亜大陸全体を指し、狭義ではデリーを中心とする北インド、すなわちガンジス川とヤムナー川に挟まれたドーアーブ地域を指していた。18

11) 英語以外では、ラテン語 *Lingua Hindostanica*、ドイツ語で *Hindostanische*、*Indostanicum* などと称された [Ahmad: XVIII-XX; Jain: 50-51]。

12) 大阪外国語大学の竹田新教授のご教示では、9-10世紀のアラブ人による地理書におけるインドに関する記述では、インドは *Hind*、インド人は *ahl al-Hind* である。なお *hind* にはインド人、ヒンドゥーの語義もある [Platts: 1236]。14世紀、トゥグルク朝のインドに8年余滞在したイブン・バットゥータは、スィンドからムルターン経由でデリーに向かうとき、インダス川下流域からムルターンまでをスィンドと呼び、ムルターンを東進、パンジャブ五大河のうち、最も東を流れるサトルジ川東岸の町アブーハル (現フィーローズプール県アボハル (Abohar) に到達した時点で「遂にインド地方に到着した」と記している [家島：302]。家島は、同書注において、アブーハルの町は、「スィンド地方とインド地方 (Bilād al-Hind) との州境の軍事拠点であり」 [家島：330]、同地でムハンマド・ブン・トゥグルクとキシュル・ハーンとの間で1328年に激戦があったとしている。すなわち、サトルジ川を挟んで、政治的、もしくは軍事的な意味で「スィンド」と「インド」の境界があったと考えられる。

13) 「ヒンドゥスターン *Hindustān*」はペルシア語で、*Hind* と同義となっている [Platts]。ヨーロッパ人による最古の記述は、1553年のBarrosによる [Yule & Burnell 1986: 416]。

14) 18世紀末の文法書では、「ジェントゥー」をムスリムの征服までの偶像崇拜者 (Gentoos, or Idolators, till the Mohumedan conquest [Hadley: iii-iv]) としている。ジェントゥーは、19世紀には「ヒンドゥー」と転化し [藤井 66]、ヒンドゥー教徒をさすこととなる [藤井 74]。ヒンドゥスターニー語にはまた、西洋人によって *jargon* という呼称も用いられた。上記 Hadley の文法書の序文には、「現在のヒンドゥスターニック語 (the present Hindoostannic) は、ヒンドゥーの居住地域で話される言語であり、それはアラビア語とペルシア語、タタール語 (Tartars) とヒンドゥイー (Hindooee) の共通語 (*jargon*) である」 [Hadley: iv] とし、「[本書で扱う] 方言 (dialect) はボンベイとベンガルで特に用いられる、共通語の訛 (corruption) である」 [Hadley: v] と述べている。ハドレイの文法書は誤謬が多いにもかかわらず、英語で書かれた文法書は当時これしかなかったため、簡便な文法書としてイギリス人の間で用いられていた [Kidwai: 77] ことから、おそらく当時の一般のイギリス人はインドの言語についてハドレイの説明程度の認識を持っていたと考えられる。ギルクリストはこの *jargon* や *Moors* (後述) という語彙の使用を殊の外嫌い、'absurd term of Moorish Jargon, or Moors' と記したり、自著名に 'Anti-jargonist' (1806), '[i]mproperly Called the Moors' [OL 1798] と記した。なおこの *jargon* という語は、18世紀の文脈では「共通語 *lingua franca*」と「仲間言葉 *cant*」の両義を持つとされ、特にインドにおいては前者の意味が強かった [Burke 1995: 3; Majeed: 196]。 *jargon* の用法・語義の変遷については、Burke 1995を参照せよ。

15) 「ムーア Moor」はムスリム自身を指し、その言語名ともなった。日本でも江戸時代、「モウル / モール」と記された。[長島 1986: 151]によれば、寛政8年、1796年に長崎奉行所の命により東京通

世紀末から19世紀初めにかけてのイギリス人による文書を見ると、「ヒンドゥスターン」という語が、以下のように狭義の「北インド」を指していることがわかる。

‘...and by the happy result of a just, wise, and moderate system of policy, extensive territories in Hindoostan and in the Dekkan have been subjected to the dominion of Great Britain, and under the government of Honourable the English East India Company... [CFW 1805: 23]’¹⁶⁾

‘On the subject of the modern dialect of Upper India, I with pleasure refer to the works of Mr. Gilchrist, whose labours have now made it easy to acquire the knowledge of an elegant language, which is used in every part of Hindoostan and the Dukhin, which is the common vehicle of colloquial intercourse among all well-educated natives; and among the illiterate also in many provinces of India, and which is almost every where intelligible to some among the inhabitants of every village. [SEI 1808: xv]’¹⁷⁾ (下線筆者)

上記の文書における「ヒンドゥスターン」は「インド India」と区別して用いられつつ、「上部インド Upper India」、すなわち北インドと同定され、「デカン」と併記されている。「ヒンドゥスターン」は、インド亜大陸の地域名として用いられていたのである。しかし実

↓ 事魏五左衛門が完成させた語学テキストに『訳詞長短話』があり、ここに記された「モウル語」は、北インドのムガル帝国をさしていた。同書収載の語彙にはベルシア語に混じって、ヒンディー語彙が混じっていた。また、同時代の日本では、西欧で好評を博していたオランダ語世界地誌「ゼオガラヒー」(1756年版)のうち「インドスタン王国ないし東インド」の部分に山村才助が1807年に訳した『印度志』や朝夷厚生『仏国考証』(1814)があった[近藤2006]。『印度志』には、インドについて、「此国地方総称して印弟亜(インデア)といふ。これ古の世よりしてかくの如く称する所にして、印度(インドス)といへる大河其地の西にありて百兒西亜(ベルシア)国との界を分つに因て名づく所なり。其土人は自称して印度斯当(インドスタン)(Indostan)といふ。これ東方諸国の方言にて土地を呼てイスタンといふ。」[近藤2006: 109]、「その古へよりの印度人と区別する為に、欧羅巴の人は其莫臥兒人を呼てモオレン(Moren)といふ…中略…上下皆一に馬哈点(まはてん)(Mahomet)の教[漢にいはゆる回々教なり]を崇信して、其古よりインド人の崇奉せし教を甚軽慢嘲笑すれ共、その印度人のなす所の芸術、技工等を甚だ賞賛す」[近藤2006: 117]とある。また『仏国考証』はモールについて、「回々の変名とす[按ずるに、莫臥兒の三字はモーゴルなり。然るを我国にてモールと呼ぶは、非なり。モールは教法の名なり。回々をモールと訓するは是なり。其宗門の諸国、すべてモール国と云。本とマゴメターネン、又マアゴメタン、訛略してモーレン、及モールと云。[中略]ゆえにモールの名はモーレンの転声にて、莫臥兒の転声には非るなり」[近藤2006: 76]とある。いずれの資料においても、当時のインドでの言語状況は記されていないものの、その記述から、モウル、もしくはモールが古来の宗教を信仰する「印度人」とは異なる、(インドの)ムスリムであるとの認識は日本でも共有され、当時インドとの交易において、インドの現地語彙の混じったベルシア語が通用していたことがわかる。

16) 1805年にフォート・ウィリアム・カレッジが刊行したもので、引用文は、カレッジでの評議会におけるMarquis Wellesley 総督の覚書(minutes)で、カレッジ開設時のもの。

17) この文章は、雑誌Asiatic Researchesの7号(p.233)に収載されたH. T. Cole Brookeによる文章をギルクリストが自著の序文に引用したものである。

際には、この定義づけが厳格でなかったため、その後も両義的に用いられていた¹⁸⁾。

そこで「ヒンドゥスターニー語」という言語名が用いられるとき、狭義での「北インドで通用する共通語」という認識とともに、広義の認識、すなわちインド亜大陸全体で通用する言語という、「あたかも『インド語』というものが存在しているかのごとくの虚構を生み出す素地を用意し」[藤井 69] ていったのである¹⁹⁾。

2 「ウルドゥーの言語」と「洗練」

一方、「ウルドゥー urdū」はトルコ語起源で「幕営/軍営」を指す名詞で、18世紀末のインドにおいては、デリーのシャージャハーンバード界隈の幕営を指す地名として用いられた。このデリー城近郊の「高貴なる幕営 urdū-e mu'allā」で話されていた口語が、アラビア語やペルシア語、トルコ語語彙を多用する独特の語り口であったことから、この口語を示す「高貴なる幕営の言葉 zabān-e urdū-e mu'allā」という呼称が省略され、「ウルドゥー」のみで言語名を表すこととなった²⁰⁾。この呼称自体、zabān (ペルシア語)、urdū (トルコ語)、mu'allā (アラビア語) という全ての外来語がペルシア語のイザーフェ (e) で

18) たとえば、「ヒンドゥスターニー」という用語を努めて使用していたギルクリスト自身が、自著の文法書において、接尾語 stan の例示の際、hindoo-stan とし、その訳語を India, hindoo-land と書いている [Gilchrist 1808: 37]。接尾語の例という特殊な状況で、hindoo-stan の訳語として「ドーアブ地方云々」と書くよりも「インド」とするほうが読者の理解を得られると考えた可能性も否定できないが、むしろ広義としての「インド」も通用していたことを示す例と考える。

19) 「ヒンドゥスターニー」という言語名の他に、19世紀初めには「ヒンダウィー Hinduwee」という語も用いられた。これについてギルクリストは、以下のごとくヒンドゥスターニーと併記し、ヒンドゥスターニーとヒンダウィーは別なものと記している [Gilchrist 1798: 333]。For the learners information and guidance, I sujoin a list of the Hindoostanee and Hinduwee poets also, that may procure and consult their respective productions occasionally, if he really desires to be an adept in the popular language and dialects of India. [OL: 333] ... In the Bhaka or pure Hinduwee, there are still many elegant poems, songs, & c. [OL: 335] 彼は特に、ヒンダウィーはヒンドゥー教徒によって用いられる、インドにムスリムが侵入する前から存在する言語として、宗教的アイデンティティを与えている (Hinduwee, I have treated as the exclusive property of the Hindoos alone, and have therefore constantly applied it to the old language of India, which prevailed before the Moosulman invasion... [OL: iii-iv])。ギルクリストは Bhaka もしくは pure Hinduwee の文人として、トゥルスイーダースやスールダース、カビールらを挙げている [OL: 335]。なお、現在「ヒンディー語」と呼ばれるデーヴァナーガリー文字による文学作品は、バーシャー (bhasha) と呼ばれていた [Jain: 53]。

20) ウルドゥー語詩人として知られるミール・タキー・ミール Mir Muḥammad Taqī Mir は、1743年頃 (ヒジュラ暦 1165年) に詩人伝 *Nikāt al-Shu'arā* を書いたといわれるが、その序文で言語に関し、「デリーはシャージャハーンバードの高貴なる幕営の言語 zabān-e Urdū-e Mu'allā Shāhjahānābād Dihlī」[Ḥaq 1935: 9] と記して、ウルドゥーという語を用いたが、これは地名として用いられている。同詩人伝では、言語名はすべて rekhta (ウルドゥー語の古称) としている [Ḥaq 1935: 7]。また、自伝 *Dhikr-e Mir* においても、言語名は「インド皇帝の高貴なる幕営の言語 zabān-e Urdū-e Mu'allā Bādshāh Hindustān」[Ḥaq 1935: 7] と記されており、「ウルドゥー」は地名として扱われている。

つながれており、この口語の性格をよく表している [Shackle & Snell 1990: 6]。

「ウルドゥー」が言語名として用いられたのは、1762年頃（ヒジュラ歴1176年）に発表されたデリーの詩人²¹⁾マール・ディフラヴィー（Mir Muḥammadi Mā'il Dihlavi）の詩集に収録されている以下の詩句が最も古いとされる [Cughtā'i 33]²²⁾。この詩句から、かつてこの言葉は「ヒンダヴィー」と呼ばれていたことがわかる。

bolā voh shakhṣ, yeh to kahānī meṇ sab sunī urdū kā batā de musalsal khulā khulā
その男の話したことは、なべて耳にした話 ウルドゥーの話をば 包み隠さず話しておくれ
mashhūr-e khalq urdū kā thā hindavi laqb agle safīnoṇ bic yeh likh ga'e haiṇ sab lallā
ウルドゥーはヒンダヴィーの名で知られしもの 愚者は皆 過去の頁にかく記す
Shāh-e jahān²³⁾ ke 'ahd se khalqat ke bic meṇ hindavi to nām miṭ gayā Urdū laqb calā
シャージャハーンの御代より人々の間で ヒンダヴィーの名は消え ウルドゥーの名が通じ出す
これに続くのがデリー詩派の詩人マスハフィー（Maṣḥafi）による以下の詩句である [Jain: 55]²⁴⁾。

khudā rakhe, zabān ham ne sunī hai Mīr o Mīrzā kī
kaheṇ kis munh se ham, ae Muṣḥafi Urdū hamārī hai
われらミールやミルザーの言葉を耳にせり
ムスハフィーよ、ウルドゥーはわれらのものと、どの面下げて言えようか

この詩句でムスハフィーは、「デリーの詩人ミールとソウダーの美しいウルドゥー語を前に、われわれの言葉がウルドゥーだと自慢できようか」、とウルドゥー語独自の美しさを賞賛している。

ウルドゥー文学史研究では、デカンで花開いたウルドゥー語による詩作が、ワリー Wali によって18世紀初めにデリーに紹介され、これを契機にレーフタ rekhta と呼ばれるウルドゥー詩が、ペルシア詩に代わって急速に発展したとされる [Jalibi 1987: 36; 187; Kashmiri 2003: 218]。そして上記詩句のように、18世紀半ばには「ウルドゥー」が言語名として、デリーの詩人の間で用いられていた。ただし後述のように、「ウルドゥー」は19世紀以降に

21) 17世紀末まで、北インドではペルシア詩が文学の主流であったのに対し、デカンのムスリム諸王朝では「ダキニー Dakni」語での詩作が発達していた。それが1687年にムガル朝によるデカン併合を機にデカンの詩作が紹介されると、北インドでもこれが盛んとなった。ミールやサウダー、ダルドラを輩出した「デリー詩派」の誕生である。

22) チュグターイーは、マールの詩の最終句「マールの園が開いた、と天使が年号を書きたる likhā tārikh hātif ne khulā hai bāgh Mā'il kā」の文字価 abjad によって詩集の完成年ヒジュラ歴1176が算出され、西暦を1760年としているが、1176年は1762-63年に相当する [岩波イスラーム辞典]。なおこの算出は、詩句の Mā'il のハムザで表記した i を ye の文字価 10 で読んだ場合の計算である [Jain 65]。

23) 詩句の韻律上、シャージャハーンは Shāh-e Jahān となる。

24) [Jain: 55] は、マスハフィーのこの詩句の発表年代について、ウルドゥー文学研究者の間で1776年という誤解が生じていると指摘している。

なっても言語名と地名の両方で用いられていた。一方「ヒンドゥスターニー」という語は、18世紀の段階では、「ウルドゥー」の詩人の作品には見られない。

1803年にフォート・ウィリアム・カレッジで教材として刊行された、ヒンドゥスターニー語散文作品の代表作『四人の托鉢僧の物 *Qiṣṣa-i Cahār Darvīsh*』の作者ミール・アンマン (Mir Amman) は、その序文において「今や我が援助者なる慇懃なる眼識の士、ジョン・ギルクリスト氏からこの物語を、ウルドゥーのヒンドゥー教徒、イスラーム教徒、老若男女おしなべて口にせる純粋なるヒンドゥスターニー語 *ṭheṭh Hindustānī guftagū* に翻訳すべきことを命ぜられました」[蒲生：6]とし、また「さて私は先人の口ずからウルドゥーの言語 *urdū kī zabān* の発達を次の如く聞いております」と記している [Amman 1992: 104; 'Abbās 2006: 09]²⁵⁾。彼の表現（「ウルドゥーのヒンドゥー教徒」、「ウルドゥーの言語」）では、「ウルドゥー」が地名として用いられており、ウルドゥーの地区で話されている言語が、ヒンドゥスターニー語のなかでも「純粋」な、独特の語り口と認識されていたことがわかる。ここに「ヒンドゥスターニー語」と「ウルドゥー語」の関係が見出されるが、ミール・アンマンは、ギルクリストの指示に基づいて同書を執筆したことから、彼の言う「ウルドゥーの言語がヒンドゥスターニー語の『純粋な』語り口」という表現は、前述のムスハフィーの賞賛にもつながるが、ギルクリストの言語認識が反映されているといえる²⁶⁾。実際、『四人の托鉢僧の物語』の第1話部分は、1801年にカレッジから刊行された *The Hindee Manual, or Casket of India* に採録されたが、1803年の単行本の第1話と比較すると、慣用句に違いがあり、手直しが入っていることが指摘されている [Khān 1992: 104-107]²⁷⁾。このような手直しによって、「より純粋で口語的な」ヒンドゥスターニー語が確立されていったのであった。

25) 本作品は蒲生礼一氏が1941年に邦訳し、1990年に東洋文庫から再版された。同訳書では「ウルドゥー語」と訳されているが、正確には「ウルドゥー（地区）の言語」である。

26) ギルクリストは、ヒンドゥスターニー語を、使用環境によって3種に大別している。すなわち、ムスリムとインドの現地人 *natives* との交流の多寡によってヒンドゥスターニー語を分別し、最も素朴なものは農村部 *country* のもので、中間は打ち解けた *familiar* もの、そして学識のある *learned* ものとして宮廷独自の話法 *court dialect* を紹介している。第1種には外来語はほとんど含まれず、第2種には外来語彙と在来語彙がほぼ半々で用いられ、第3種はアラビア語彙やペルシア語彙が多用されるとしているが、外来語彙の使用頻度に関する具体的な例示はない。ギルクリストは、ヒンドゥスターニー語に異なる語り口が多様にあるとしながらも、この言語が、インド亜大陸において行政や交易上最適かつ最重要であると、その有用性を強調している [OL: iv]。

27) たとえば、*dard se taraphne lagā* を *dard se be-qarār hu'a* と表現上よりの確な語彙に変えたり、*karam kī rekhā miṭṭī nahīn, in ānkhon ke sabab yeh kuch dekhā* を *miṭṭī nahīn karam kī rekhā, in ānkhon ke sabab yeh kuch dekhā* として、押韻によってリズムを持たせる効果が出たと指摘されている [Khān 1992: 105]。[Khān 1992: 104] は、ミール・アンマンとともにカレッジに勤めていたアフソース (Mir Sher 'Alī Afsos) が手直したと推定し、これにより、同作品には、ヒンドゥスターニー語のあらゆる表現方法が、自然な形で組み込まれたという。しかし書記だったアフソースが、自発的にミール・アンマンの著作の語彙を変更したとは到底思えない。ここにはギルクリストの指示乃至は介在があったと考えるほうが自然だろう。

ギルクリストは、ウルドゥー語を、自身の考案した表記法に基づいて Oordoo²⁸⁾ と記し、「洗練された言語 polished language」といった定義を行なっている。これは「異なる言語」というよりも、polished が示すとおり、異なる「口調」「表現法」によって成立した方言 dialect を指す²⁹⁾。ギルクリストは、ヒンドゥスターニー語における子音 q と k の発音について、ヒンドゥーと、身分の低いムスリム (the Hindoos and low Moosulmans) は一般的に混同しており (commonly confound them)、同様に、f, sh, z, zh といった発音についても、p, h, s, j と混同していると指摘している [OL: xii]³⁰⁾。つまり、ペルシア語が用いられたデリー城近郊の幕営「ウルドゥー」に住む「身分の高い」ムスリムは、アラビア語やペルシア語独特の発音も区別できたが、ペルシア語文化に触れることのないムスリムにあっては、外来の発音ができなかったと説明している³¹⁾。この「発音の違い」が、「洗練された口調」の根拠のひとつにあったと考えられる³²⁾。

ギルクリストのこの説明を裏付けるように、彼と同時代にいた詩人インシャーは、ペルシア語によるウルドゥー語文法書『優美な大海 *Daryā-i Latāfat*』³³⁾ (1808 年) において、ウルドゥーの言語を「シャージャハナーバードの言葉」[Inshā 1935: 121] とし、これが「洗練された (faṣīḥ)」言語であり、「流暢に話すものたち (fuṣaḥā) の言語」であることを繰り返して述べた [Inshā 1935: 35-38; 112-125]。インシャーは「ウルドゥー」の地名について、「デリー城 (qil'a-e mubāarak bādshāhi) や 2 つの街区 (do muḥalle), サイド・フィーローズ (Saiyid Firūz) 宅からイスマーイーール・ハーン (Ismā'il Khān) 宅、さらに女王の邸宅 (ḥaveli) まで、郡 (ḡila') がごとき地区」[Inshā 1808: 36] とかなり具体的に特定し、デリー城界隈の、宮廷に暮らす人々と接触の多い地域を挙げている³⁴⁾。インシャーはさらに、

28) oordoo の表記は最初の oo がつながって短母音の u を指し、最後の oo は離れていて、長母音の ū を表す。したがって、日本語で書く場合は「ウルドゥー」となる。

29) 『四人の托鉢僧の物語』の原作とされるタハシーン Taḥsīn 作 *Nau Tarz-e Murāṣṣa* は、ペルシア語の原作のウルドゥー語への翻訳で、難解なウルドゥー語散文として知られるが、イギリス人の指図なしで書かれた散文である点で、当時の「ウルドゥーの言語」を知る手がかりとしてさらに再考されるべきであろう。

30) 原文 'the Hindoos and low Moosulmans commonly confound them, as they also do fu, sha, zu, zhu, with pu, p, hu, su, and ju.' [OL: xii] ギルクリストは他の場所でも、'difference may be also found in the pronunciation' [SEH: xvii] として、その発音でヒンドゥスターニー語の語り口に差異があると指摘している。

31) ウルドゥー語の慣用句に「シーンとカーフが正しくなる (shīn qāf durst honā)」があり、「正しい発音ができる」という意味になる。それだけこの発音がインドの人にとって難しいことを示している [Sarhindi: 969]。

32) ただし、ギルクリストの言う「ヒンドゥー」は、ムガル宮廷で書記などとして活躍した、ペルシア語のできるカーヤストらを含んでいないと考えられる。

33) 同書は 9 章から成り、7 章までをインシャーが、第 8、9 章を Mirzā Muḥammad Aḥsan Qatīl が執筆した。

34) インシャーは、他説として、カーブリー門 (Kābli Darwāza) とその外シャー・フダー・ヤール (Shāh Khudā Yār) の庵 (takiya) まで、さらに故ナワブ・シャッビーール・ジャングア

ウルドゥーに住む人々が用いる独特の語彙や慣用句を列記している³⁵⁾ [Inshā 1806: 125-168]。インシャーの記述から、ウルドゥーの語り口は、文法的には他の方言と大差なくとも、話せば明らかな差異があったものと想像される。『四人の托鉢僧の物語』の文体は簡明な口語体として知られ、近代散文の端緒とされるが、ウルドゥーの語り口の特徴は、アラビア語・ペルシア語などの発音を受け容れつつ発達した、独特の語り口であったといえよう。

したがってギルクリストは、ヒンドゥスターニーがしばしばヒンディー、ウルドゥー、レーフタなどと呼ばれている [SEH: xvii] という一般論を紹介しながら、ウルドゥー語については「oordoo zuban, or language of the royal camp and court」 [SEH: xvi] とその地域性を明記している。彼は、ヒンドゥスターンという語が合成語 compound word で Hindoo-land, もしくは Negro-land を意味し、ヒンドゥーやムスリムが主に居住する地域を指しており、ヒンドゥーとムスリム両者が、「ヒンドゥスターニー」と包括的に呼ばれていると説明し、この地名が現地の言葉においても新しく ([t]his name of the country being modern), この地域の言語名を選ぶ場合、「ヒンド Hind」の派生語である「ヒンディー Hindee」や「インディアン Indian」があるが、「ヒンドゥ Hindoo」の派生語である「ヒンダウィー Hinduwee」「ヒンドゥイー Hindoo, wee」「ヒンダヴィー Hinduvee」と混同してしまうおそれがあることなどを理由に、他に適当な語彙がなかったことから、この地名の派生語である「ヒンドゥスターニー」を言語名に採用したと述べている [OL: iii]。

「ヒンドゥスターニー語」という名称が在来のものか、ヨーロッパ人がつけたものかは不明だが、ギルクリストが「ヒンドゥスターニー」という言語名に共通語としての意味をイギリス東インド会社の中で確定させたことはまちがいない。Das [1978: 44] は、ギルクリストが「ウルドゥー」という言語名をなぜ使用しなかったかは不明だが、ペルシア語の影響を受けたウルドゥー語と、カーリー・ボーリーの中間的な存在の新たなスタイルを創出したかったのではないかと推測している。筆者も同意するところだが、それに加えて、前述の通り「ヒンディー」と「ヒンダヴィー」などの混同を避けるうえに、カルカッタにおける共通語教育で、「ウルドゥーの言語」とすることで生じかねない地域的限定性をなくそうとする意図があったと考える。当時のイギリス東インド会社の拠点はカルカッタであり、その現地語教育は、ヒンドゥスターン、すなわち北インド地域で広範に理解される共通語を求めていた³⁶⁾。

↙ (Nawwāb Shabbīr Jang marḥūm) [邸], ナワーブ・サアダト・ハーン (Nawwāb Sa'ādat Khān) [邸] からハバシュ・ハーン (Ḥabash Khān) [邸] 大門まで含まれる, など諸説を紹介している [Inshā 1935: 36-37]。

35) この慣用句は、在来の語彙を用いたものが多く、ペルシア語彙はあまり見られない。『優美な大海』における慣用句のうち、諺について研究したものに、古賀 1977 がある。

36) ギルクリストの後任 Thomas Roebuck は、ウルドゥー語を「the refined and elegant Language, which is denominated OOrdoo, or the Court dialect of Hindoostan」 [ACF: 448] とヒンドゥスターニー語うち、宮廷の語り口であると限定している。

ギルクリストは、「ヒンドゥスターニー語」という名前に、その広範な有用性を強調しなかったのである³⁷⁾。

ここで重要なのは、18世紀末から19世紀初めにかけて、インド人との対話においてイギリス人が習得すべき言語が、ペルシア語から「ヒンドゥスターニー語」という共通語に移行しつつあったという点である³⁸⁾。それまでイギリス東インド会社は、ペルシア語などを現地語習得のためにインド人家庭教師を雇用するため、手当 Munshi's Allowance [Bowen 1955: 8] を支給していた。だが行政や交易上、ペルシア語よりもより一般的な口語の習得に対する関心が高まっていた。DNB [1221] は、ギルクリストについて、それまでイギリス人がペルシア語を学んでいたなかでヒンドゥスターニー語の重要性を説き、この言語をより一般化させたことにあると評価している。

ムガル朝における文語がペルシア語であったことから、ペルシア語的な音声と語彙、文字を持つ、「洗練されたヒンドゥスターニー語」である「ウルドゥー」の名が、共通語「ヒンドゥスターニー」とともに広まったのは必然であった。そして、ヒンドゥスターニー語という呼称自身が持つ両義性のために、「ウルドゥー語＝インド亜大陸の言語（ヒンドゥスターニー語）」というさらに広義の解釈を生むことになったと考えられる。

ギルクリストは自らが教授した言語名を「ヒンドゥスターニー語」とした³⁹⁾。だが1804

37) 彼は、自著 *Hindoostanee Philology* において、ヒンドゥスターニー語が、「英領インドの全地域に於いて、すべての階層の人々に一般的に用いられる言語」[HP:表紙] とし、この言語が、宮廷や都市 *metropolis* だけでなく、ヒンドゥスターンの広範な地域で理解されることを強調し [SEH: xix-xx]、いかなるムスリムも理解可能で、ヒンドゥーであっても、ムスリムやイギリス人と接触のある者なら少なからず理解できると説明している。さらに、ヒンドゥスターニー語はい陸軍 *armies of India* でも有用であり、広く用いられる *universal language* として、コモリン岬からカーブルまで、南北2000マイル、東西1400マイルのガンジス川流域で理解されており、この言語を理解できない者はほとんどいない [SEH: xxi-xxii] と、執拗なまでに有用性を述べている。また、「ベンガル、ビハール、オリッサ、ベナレス各州の裁判所や登記所ではヒンドゥスターニー語かペルシア語が [適当であり]、ベンガルとオリッサ州の歳入、徴税、商取引、塩の貿易においては、ベンガラー語」で、「ビハールとベナレス州における歳入、徴税官や商取引、オピウムの取引にはヒンドゥスターニー語」が適当とも記している [Gilchrist 1810: xxvii-xxix]。

38) 前述 [注15] のように、『訳詞長短話』においてインド人との交易で用いる言語は、インドの現地語、すなわちヒンディー語の語彙をまじえたペルシア語であった。当時のインドでも宮廷や文学界ではペルシア語が用いられたが、そのペルシア語にもインド在来の語彙が混じっていた。そこでこのようなペルシア語は「インド式 *sabuk-i Hindi*」と呼ばれた。また1780年、オクスフォード大学はペルシア語教授と、ペルシアあるいはインドスタンからの講師の採用の公募を行っている。公募ではペルシア語の文化的要素と共に、東インド会社のインドでの展開において同言語の有用性が強調されている [Rahman: 1-7]。

39) 大英図書館にはギルクリスト自筆の加筆が残されたカレッジ関係の文書が所蔵されているが、そこではインドの現地語教育について、アラビア語やペルシア語の重要性が説かれているが、彼は「アラビア語」の部分をごとくペンで消し、「ヒンドゥスターニー」と訂正している [PVE]。

年にギルクリストがイギリス帰国すると、カレッジでは「ヒンドゥスターニー語」と「ウルドゥー語」がほぼ同一語とみなされた [Das 1978: 43]。たとえば、ギルクリスト離任直後に刊行された、ミール・ハサンの『除法の魔術 *Şihr al-Bayān*』⁴⁰⁾には、この言語名を *Hindoostanee* としているが [Hasan 1805]、1811年に刊行された『ミール全詩集 *Kulliyāt-e Mir*』⁴¹⁾には、*Kooliyat Meer Tuqee, The Poems of Meer Mohumud Tuqee, The Whole of His Numerous Celebrated Compositions in the Oordoo, or Polished Language of Hindoostan* と記されている [Meer 1811]。カレッジは基本方針として、インド各地に配属される東インド会社員がどこでも通じる言語の習得を推奨している [CFW: 9]。

なお、北インドにおけるデリー方言としてのウルドゥー語の汎用性に関して言えば、インシャーの前述書『優美の大海』において、18世紀に相次いで起こった、ナーディル・シャーやアフマド・シャーによるデリーへの侵攻のために、「洗練された」ウルドゥー語を話していたデリーの文人や職人、芸人らが皆ラクナウーなど「流暢に話す人々」が東部地域などに脱出し、この地域にデリーのウルドゥー語が広まった、と記している点が興味深い。インシャー自身を含め、ミール・タキー・ミールやミール・ハサンなど多くの文人が18世紀半ばにラクナウーに移住し、「ラクナウー詩派」の中核を形成したことを考えると、インシャーのこの指摘は、デリー方言がヒンドゥスターン地域において共通語といえるほど理解されるようになったことを考える上で示唆に富んでいる [Inshā 1935: 113-125]⁴²⁾。

II 「共通語」としての「ヒンドゥスターニー語」の記述文法

1 行政者養成のための現地語教育機関の設立

1800年8月18日、カルカッタの Writers' Building という建物の一角に、イギリス東インド会社員の現地語習得機関フォート・ウィリアム・カレッジが開設された⁴³⁾。設置者のベ

40) 部分訳に山根 2001 がある。

41) 抄訳に松村 1996 がある。

42) デリーを離れた詩人たちは、デリーへの哀悼詩を記した [山根: 2000; Yamane 2000]。インシャーのこの記述から約1世紀後、グリアソンは言語調査において、ウルドゥー語を「純粋なヒンドゥスターニー (Theth Hindostani)」, 「ラクナウーの文学的ウルドゥー (Lucknow Literary Urdu)」, 「ラクナウーの村落部でのウルドゥー語 Lucknow Qasbati Urdu」, 「ラクナウーの貴婦人たちのウルドゥー Lucknow Begamati Urdu」, 「デリーの標準的ウルドゥー Standard Urdu of Delhi」などに分類し、ラクナウーの文学的ウルドゥーをペルシア語の借用語を多用したものとし、他方デリーのウルドゥー語について、ラクナウーのウルドゥー語に見られる極端なペルシアの文体の影響を避けた、簡明なものとしている [Grierson: 95-146]。ラクナウーにおけるペルシアの文体の発展や、デリーのウルドゥー語の簡明さについては、今後さらなる考察を要する。

43) Seringapatam でのイギリス軍の勝利した日を記念して、1800年5月4日が創立記念日と制定された [Das 1978: 5-6]。

ンガル総督ウェルズリーは、カレッジ設立時、インドの習慣や法に加えて、現地語の実用的な知識を体系的に習得させることを強調した [CFW: 21-22]。

カレッジでは、アラビア語、ペルシア語、サンスクリット語、ヒンドゥスターニー語、ベンガラー語、テルグ語、マラーティー語、タミル語、カンナダ語がイギリス人とインド人によって教授された [CFW: 27]⁴⁴⁾ 上に、ヒンドゥー法とムスリム法、倫理学、国際法 the law of nations, そして英国法なども科目に組み込まれた [CFW: 27] が、とりわけヒンドゥスターニー語教育に力点が置かれ、学生数も多かった⁴⁵⁾。カレッジ創立時インド総督ウェルズリーは、18世紀以降のインドにおけるイギリスの覇権確立の業績を挙げた上で、「イギリス東インド会社社員は、もはや交易の代行者ではなく、強力な主権を有する官僚である⁴⁶⁾」 [CFW: 5-6] と述べた。カレッジの報告書も、カレッジ設立の目的がインドを統治する若者を教育すると記している [CFW: 155]。こうした行政官育成と現地語習得を必要とした背景には、初代ベンガル総督ウォーレン・ヘースティングズ (Warren Hastings) による現地語習得の奨励があったが、当時渡印していたのが17歳前後の若年層を主流としたため [Bowen 1955: 8]⁴⁷⁾、教育面のみならず、倫理面の向上が求められていた点もあった。Hadley [1796: 175-176] によれば、1763年のカルカッタにはイギリス人未婚女性は3人しかおらず、イギリス東インド会社員のなかには、インド人女性との婚姻関係を持つ者があった。両者の間に生まれた子どもは half caste や Eurasian と呼ばれたが、イギリス東インド会社は、この事態を、間違っただけで危険 (erroneous and dangerous) で、無分別な (indiscretions) 状態として憂慮し、ジェントルマン養成が急務との提言を行った [EIC 1804: 14-16]。ヘースティングズに続いて1786年にベンガル総督となったコーンウォリスは統治機構を整備し、1793年、イギリス東インド会社が、インド人や、インド人とイギリス人の間

44) カレッジ創立時は学寮長 (Provost) 1名、副学寮長1名を含むイギリス人8名で構成される評議会と、イギリス人教師16名、試験官4名、臨時試験官6名、現地書記官 (moonshes, maulvies, pundits) ヒンドゥスターニー語35名、ペルシア語30名、ベンガラー語15名、アラビア語8名、サンスクリット語8名、マラーティー語3名、タミル語、カンナダ語、ブラジ・バーシャ (古ヒンディー語) 各2名、バシュトー語、テルグ語、オリッサ語、マレイ語、中国語各1名、さらにアラビア文字およびペルシア文字、ナーガリー文字、ベンガラー文字の書家各1名と、図書館員3名が置かれた。

45) 学生は複数の言語を習得し、受験することができた。1801年7月の第1回試験受験者数は、ヒンドゥスターニー語が36人、ペルシア語が27人である。同年12月の第2回試験ではヒンドゥスターニー語で48人、ペルシア語で50人、アラビア語で10人、ベンガラー語で9人が受験した。1804年1月の第4回受験者数は、ヒンドゥスターニー語が53人、ペルシア語が38人、1805年1月の受験者数はヒンドゥスターニー語が41人、ペルシア語が22人、ベンガラー語が13人、マラーティー語が5人、アラビア語が5人となっている [ACF: 19-22, 71, 94-95]。

46) 原文は以下の通り。The civil servants of the English East India Company, therefore, can no longer be considered as the agents of a commercial concern; they are in fact the ministers and officers of a powerful sovereign.

47) カレッジの報告書は、渡印したイギリス人の多くは16-18歳だったと記している [CFW: 8]。

に生まれた子どもを正規の職員として雇用することを禁じた [Sikka 1984: 22]。1805年刊行のカレッジの報告書は、これまでの東インド会社が抱える問題は、インド人を接することなく文書を書写する作業に追われ、現地語を理解しようとしなかったことにあり、これによって墮落する会社員が現れたと指摘し、かかる事態がイギリス国家 (the state) を傷つけるものであり、現地語を理解し、倫理観と良き慣習を持った若者を育てるべきとしている [CFW: 11; 23]。そこではキリスト教的倫理観の確立と行政者としての自覚が求められたが、これをチャールズ・グラント (Charles Grant) のような福音主義者が支持した [Sikka 1984: 29]⁴⁸⁾。こうして現地語教育は、行政者養成上の政治的、社会的な要請を受けて推進された。ウェルズリーは、オックスフォードやケンブリッジ大学をモデルとし、3年間の教育を計画した [EIC 1976: 5-6]。現地語教育機関の需要は高まり、フォート・ウィリアム・カレッジ設立後には、ボンベイ、マドラスにも同様の教育機関が設置され、語学試験は共通のものが課せられて、成績上位者には賞金が授与された⁴⁹⁾。さらに渡印前に基本的な語学力や行政能力を身につけさせることを目的に、1806年にはロンドン郊外 Hertford Castle 内にもインド現代語の教育機関 (East India Company College 1806-1858) が設立された [EIC: 1976]⁵⁰⁾。

こうしてイギリスは実用的な現地語教育を推進したが、ここでの関心は、インドの生きた言語にあった [Das 1978: 119]。Kidwai [1972: 30] も、カレッジの最大の貢献が、口語の可能性を発見したことにあると評価している。

2 ヒンドゥスターニー語記述文法の成立

(1) 在来の文法書

このように、在インドのイギリス人が学ぶべき北インドの共通語として「ヒンドゥスターニー語」が設定されると、その文法書の編纂が進められた。それまでの在来の文法書は、詩

48) ギルクリストも、1801年の著書 [HP] の表紙に、イギリス東インド会社の役員会 (the Court of Directors) とともに、理事のなかでも、チャールズ・グラントとウィリアム・アステル (William Astell) については特に名前を挙げて献辞を送っている。

49) 1804年実施のヒンドゥスターニー語試験では成績第1位および21位がボンベイ校の学生で、14位、15位、23位にはマドラス校の学生が入っている。成績は上位3名が first class で1位には1600ルピーと金メダル、2位には1500ルピーと金メダル、3位には1300ルピーが授与された。続く3名は second class で、その1位 (総合4位) には1400ルピーと金メダルが、2位には1200ルピー、3位には1000ルピーが与えられた。さらに third class の1位 (総合7位) には1100ルピー、2位には900ルピー、3位には700ルピーが、fourth class 1位 (総合10位) には800ルピー、2位には600ルピー、3位には500ルピーが与えられた [AFC: 9]。

50) ウェルズリーは、若年の子どもをインドに送る親の心配を解消するため、イギリス本国内にカレッジを設立したと触れている [CFW: 20]。この東インド会社カレッジ設立にはチャールズ・グラントらが強く関与した。同カレッジは1809年に Haileybury に移転した。同カレッジは現在 Haileybury College となっている。

の韻律の解説か、ペルシア語彙集や、サンスクリット系語彙の解説といった体裁をとっていた。ムスリム諸王朝のもとで文芸が発達したデカンでは、17世紀からダキニー語詩集のほかに、ペルシア語彙集が、主としてペルシア=アラビア文字で記されていた。これら語彙集の多くは、詩句の体裁等でペルシア語彙の語義を示したものである⁵¹⁾。文字を読み書きできる文人にとって、学ぶべきはペルシア語やサンスクリット語の語彙であって、文法ではなかった。またムガル朝も、ペルシア語を排他的に用いていたわけではなかった [藤井：67]。たとえばデリーの文人ラースィフ 'Ināyat Khān Rāsikh (b. 1702) による *Kāristān* では、ナーガリー文字のうち、ペルシア語で表記不能なインド固有の音声、たとえばそり舌音などの文字が考案され、転写の基準が示された [Naushāhi 2004]。このことは、ナーガリー文字で書かれた著作をペルシア=アラビア文字に転写する作業が実践されていたことを示す。口語であるヒンドゥスターニー語が文字化される過程で、ペルシア=アラビア文字による、在来音の文字化が行われた。それは、ヒンドゥスターニーと呼ばれる口語が、文字文化とは別に、アラビア語、ペルシア語、在来語のさまざまな語彙を、それぞれが持つ独自の音とともに取り込んでいたためである。

そこでラースィフは、在来語に特徴的な帯気音や鼻音をペルシア=アラビア文字で表記する場合、各文字の下に「ˆ」をつけ、(例：ن ˆب) とし、同様に、そり舌音については、文字の上に四つの点をつける方法 (例：ت ˆˆˆˆ ذ) を示した。これは、在来語をペルシア=アラビア文字で転写する上で、その表記の統一を図ったものとして、きわめて重要である。このように在来語固有の音の転写について工夫はなされたが、転写表記の統一には至らなかった。19世紀初めまでの主だった写本を見ると、そり舌音「t」の場合、「اتھیا」 [Phulban 1650: 20], 「اتھہ」 [Diwān-e Walī 1732: 85], 「ت」 [Kāristān 1750 (?): 109-110], 「اتھایا」 [Rāg Mālā 1759: 64], 「انکوٹھی」 [Qiṣṣa Saif al-Mulūk o Badī:

51) 大英図書館所蔵の [I. O. 4780], [ff 51 r-53 r] および [ff 53 v-66 r] はデカンで編纂されたペルシア語彙集である。また *Khvān-i Yaghmā* [Ethe 3053, 37 f] は1758年にデカンで Tāhir なる詩人が書いた、詩句の形態でのペルシア語彙の語義を記した詩集である。また *Kalid-i Alfāz-i 'Ajam* [Ethe 2803, ff 38-66 r] は18世紀末に書かれた語彙集で、ペルシア語彙とともにウルドゥー語の訳語が付されている。このような語彙集はその後も書き続けられ、19世紀に入っても、[OIOC 1411 b. ff. 202 V] のように、デリーで書かれたペルシア語彙集で、アルファベット順にペルシア語とその訳語がウルドゥー語で書かれているものもある。同様に [I. O. 4780. 77 f] は、ウルドゥー語の慣用句のペルシア語対訳を記したものもある。語彙集で最も優れたものは *Tohfāt al-Hind* [Ethe 2442, 335 f] である。これは18世紀に、デーヴァナーガリー文字で書かれた語彙のペルシア語およびウルドゥー語対訳が付されたものである。このような語彙集はアラビア語とウルドゥー語の対訳でも編纂され、17世紀の、*Lughāt va Muṣṭalāhāt-i Tibb* [Ethe 2377, ff 1 v-115] は、アラビア語、ギリシア語、トルコ語の医学用語の対訳がペルシア語とウルドゥー語で書かれている。同様に18世紀に書かれた [Ethe 3055, ff 60 v-100 r.] ではアラビア語の鳥や魚、動物などがトルコ語、ペルシア語とともに紹介され、その意味がダキニー語で書かれている。

80) 「اوتھی」 [Diwān-e Yaqin 1780: 12], 「تھا」 [Gulishan-e 'Ishq 1785: 1] 「بت」 [Tohfat al-Hind⁵²⁾], 「روتی」 [Qādrī Bārī 1796: 3], 「اوٹھا」 [Diwān-e Soz 1801: 17], 「میٹھائی」 [Rānī Ketkī kī Kahānī: 2], 「بیٹھی」 [Hindee Story Teller 1803: 55], 「اوٹھائی」 [Diwān-e Afsos 1810: 37], 「اٹھایا」 [Kulliyat-e Meer 1811: 442], 「ت」 [AFW 1819: iv], 「نتوتی」 [Kulliyāt-e Sawdā 1825: 59] といった表記が見られる。このように、ラースィフによる、在来の音のペルシア＝アラビア文字での転写統一の動きがあったものの、実際には書家 katib の裁量に委ねられたままだった。このため、18世紀後半にヨーロッパ人によって始められた活字化後も転写はさまざまな方法で行われ、複数の書家による1冊の詩集では、途中で文字表記が異なる例も見られた [Saudā⁵³⁾].

ラースィフにやや遅れて、18世紀初めには、アールズー (Sirāj al-Dīn 'Alī Khān Ārzū) が *Nawādīr al-Āfāz* という初めての本格的なウルドゥー語辞書を編纂した。さらに前述インシャーの『優美の大海』は、ウルドゥー語に関し名詞の複数変化、斜格変化、代名詞、形容詞や動詞の変化などが例示とともに解説し、初期のウルドゥー語文法書と評価される [Shackle & Snell 1990: 89] が、同書では、正書法に関する言及はない。

(2) ヨーロッパ人による文法書

一方ヨーロッパ人による文法執筆作業は17世紀後半より開始され [藤井: 67], ドイツ人ケテラー (John Joshua Ketelaer) やオランダ人シュルツ (Benjamin Schultze) らによる文法書が刊行された [Schultze 1977]。当初はキリスト教の宣教を目的としたもので、ケテラーの文法書には聖書の翻訳が含まれ、シュルツ自身はデンマークから宣教を目的に派遣された人物で、文法書はマドラスから刊行された。

ところが、18世紀後半になって、イギリス東インド会社が1757年のプラッシーの戦いに勝利し、北インドにおける覇権においてイギリスが優位に立つと⁵⁴⁾、支配政策の一環として、イギリス人による現地語の習得の需要が高まった。イギリスからは多くの若者が一攫千金を夢見てインドへ渡ったが、10代の年齢でイギリス本国での教育も十分受けないままインドに渡った彼らにとって、東インド会社で勤務するためには、現地語の習得が不可欠だった。東インド会社自身も現地語習得を重要視し、社員に対し現地語習得を奨励し、現地人家庭教師雇用の特別手当や翻訳への多額の報酬などの方策を実施した [栗屋: 4]。こうして、植民地支配における現地語の教育は本格化していった。

52) 写本にページ数が記されていない。

53) たとえば、そり舌音で ت [Sawdā: 2] と ط [Sawdā: 134], g を ک [Sawdā: 2] گ [Sawdā: 59] と表記するなどがある。

54) ベンガル・インド総督ウェルズリーは、フォート・ウィリアム・カレッジ設立に際してフランスに対する勝利など、イギリスの優位を強調している [CFW: 1-3]。

フォート・ウィリアム・カレッジが設立される直前の1784年、ウィリアム・ジョーンズ William Jones らによってアジア協会 Asiatic Society が創立された。アジア協会では「インド・ヨーロッパ語族の発見」とともに、アラビア語やペルシア語、サンスクリット語などの古典に関心が払われたが、植民地行政の変化により実用会話の需要が高まり、「より実用的、より口語的」な文法書が編纂された。だが当時、英語でのヒンドゥスターニー語の文法書は、ジョージ・ハドレイによる [Hadley 1796] 程度しかなかった [Şiddiqī 1960: 39]。同書は、文法的に誤謬が多いものの、口語として最低限の情報を提供した上で、インドに居住する上での情報や、巻末に簡単な会話集を収載している。この点で、文法書より現地語会話集の体裁であるが、簡便かつ安価であったため、売れ行きがよかった⁵⁵⁾。

ハドレイの著作のように、18世紀末までに刊行された現地語に関する刊行物は、実用的会話の例文を主体とした簡便なものしかなかった。文法執筆者も、ギルクリストのように個人で語学学校を主宰し、詳細な文法書や辞書を記すほどの「専門家」は少なかった⁵⁶⁾。ウェルズリーは、カレッジ教員採用の際、ウィリアム・ジョーンズの業績を継ぐ研究者を探し、1978年に、イギリス東インド会社として、ギルクリストをヒンドゥスターニー語の専門家に選んだ [EIC: 6; Şiddiqī 1960: 37]。そして1799年1月にはカルカッタ内に、Oriental Seminary として、ペルシア語とヒンドゥスターニー語の教育施設を設立、「ギルクリストの学校」と呼ばれたこの施設を基盤に、カレッジが設立されたのである。カレッジ設立にはイギリスの政治的背景があったが、19世紀に入る時点で、会話集や文法書、辞書などの一定の成果がヨーロッパ人によって刊行されていたことも重要な要素であろう [Kashmiri 2003: 480]。ウェルズリーの信頼を得たギルクリストは、ヒンドゥスターニー語の専門家としてカレッジを舞台に手腕をふるった。カレッジの年報では、学生による諸言語での弁論大会の成果報告⁵⁷⁾がなされ、参観者 (visitor) は常に満足感を示し [CFW: 61]、ギルクリストの尽力に対する賞賛が記された [CFW: 79-81; 83]⁵⁸⁾。

さらにギルクリストは、カルカッタに「ヒンドゥスターニー・プレス Hindoostānee Press」印刷所を1802年に設置し [Das 1978: 82-83]、多くの教材を刊行させた⁵⁹⁾。カ

55) ハドレイの著作に対するギルクリストの批判は痛烈で、[t]he sale of Hadley's insignificant catch-penny production [OL: i] から始まり、the dog cheap trash [OL: iii] と3ページにわたって、同書の表記や語彙集などに関し厳しく批判している。

56) このような背景には、インド諸言語の研究分野において、サンスクリット語やペルシア語研究に比べ、口語への関心が高くなかったことも挙げられる。

57) 弁論大会では懸賞金も支払われた。この論題はギルクリストが策定したと思われるが、1803年の弁論大会の論題について、学生から反発があり、ギルクリストはカレッジ内で批判を受けた。

58) カレッジの報告書は、カレッジの設立が、ギルクリスト個人がカルカッタで開催していた語学学校の再建であるとも書いている [CFW: 82]。なお、カレッジは設立直後から存続を巡ってイギリス本国とカレッジの間で駆け引きがあり、決して順風満帆ではなかった。

59) カレッジでは、活字本に加えて、多くの写本も編纂された。ギルクリストが好んだ詩人サウダーの大部の詩集などがそれである [Sawda: 1825]。Hindoostanee Press については、Das 1978; Ahmad 1985 に詳しい。

レッジはヒンドゥスターニー語をはじめとする諸言語で132冊の教材を刊行した [Das 1978: 68] が、多くはギルクリストの指導の下に刊行された⁶⁰⁾。ウルドゥー文学史におけるギルクリストの評価は、彼が刊行させた散文教材の文体が口語体に近かったことから、近代散文の確立を招いたという点に集中している [Şiddiqi; Kidwai; 'Ubaida]。

また刊行事業による口語の活字化は、それまで書家によって異なっていた文字表記を統一できた点で重要な意味を持つ。1778年、サンスクリット学者だったチャールズ・ウィルキンズ Sir Charles Wilkins は Hoogly でベンガリー語文法を活字化させると、1780年にはカルカッタから175マイル北の Malda でペルシア文字(ナスターリーク文字)による英語=ペルシア言語彙集を初めて刊行させた [Aḥmad 1985: 55]。ウィルキンズはペルシア文字の優れた書道家としても知られ、その活字も評価が高かった⁶¹⁾。ペルシア=アラビア文字は美しい書体が発達しており、活字でその書体を完全に再現することは困難なため、コンピュータで筆記体が再現される最近まで、活字文化が根付くことはなかったが、19世紀初めの活字化作業が、文字表記の統一を進めたことはまちがいない。

III ヒンドゥスターニー語の文字と正書法

このようにヒンドゥスターニー語の記述文法は、18世紀末にインド人(インシャー)とイギリス人(ギルクリスト)の間でほぼ同時期に進められた。インシャーがなぜ文法書執筆に関心を示したのか、また彼がイギリス人の文法書執筆作業を知っていたかは不明だが、ここではインシャーとギルクリストによる文法書の、文字や正書法に関する記述を考察したい。

1 インシャーの文字に関する論考

インシャーは前述『優美の大海』中で、ウルドゥー語の正書法について議論していないが、その文字数について以下のように述べている。

「ウルドゥー語(Urdū)は多くの言語のエッセンス('iṭr)であり、このために文字数は多い。流暢に話す者たち(ḥaṣāḥā)や研究者たち(muḥaqqiq)の見解ではその総数が85だが、一般の人々('awām)や研究とは無関係な人々は95と定める。[文字として数えるには]4文字が疑問

60) AFW [21-29]には、1819年までに刊行されたカレッジ刊行物が紹介されているが、文法書4冊のうち3冊がギルクリストの自著で、残り1冊はギルクリストの指揮superintendenceとあるように、ヒンドゥスターニー語、カリー・ボーリー(ヒンダヴィー)、ブラジ方言、プールビーなど計43冊中20冊に彼の名が言及されている。ブラジ方言のRajnitiの場合、ギルクリストの切望desireで刊行された、と紹介されていることから、カレッジ刊行事業に対するギルクリストの関与の大きさがわかる。

61) ウィルキンズはウィリアム・ジョーンズやジョン・シェイクスピアの著作の石版印刷も手がけた [Ahmad 1985: 58]。

に残る。すなわち, dāl や khe を nūṅ とともに発音する場合, また, sin を yē とともに発音する場合, そして jim を hē とともに発音する場合。同様に cē を hē とともに発音する場合。さらに 6 文字について議論の余地がある。すなわち, zē と shin が nūṅ とともに混合した (makhlūt) 場合, pē と alif が wā'o と連合した (muttaḥid) 場合, そして mim が yē や nūṅ と一緒になった場合」 [Inshā 8-9]

ここでインシャーが主張するのは、鼻音化した ṅ (例: daṅgā の daṅ, khaṅjar の khaṅ)⁶²⁾ を独立した文字として扱う場合や, sh, j といった子音に短母音 i のついた場合 (例: shikār の shi, jiyā の ji, milā の mi) を, sha, shu, ja, ju とともに, 独立した文字として数えるべきであるということ, さらには, 帯気音 jh, ch, dh などペルシア=アラビア文字では 2 文字で表す音声を j や c とは別個の文字として扱うという主張である。しかしインシャーは, 鼻音化した ṅ や帯気音の正書法については言及していない。また子音と短母音の組み合わせについては, ナーガリー文字では sha, shi, shu, she, sho などはずべて子音 sh に母音の音声区別記号がついて区別されるが, ペルシア=アラビア文字の場合は, sh に yē をつけて書く方法 (شیه)⁶³⁾ と, 母音を示す諸記号 (zabar, zer, pesh 等) によって区別する両方が採られている。18, 19 世紀の写本においては, この両方の例が見られ, 同じ頁の中でも異なる表記が見られる。ただし, これらは詩作における表記であるため, 韻律を理解している読者ならば, اوس を us と読むか, ūs と読むかは区別できるのである。後者の記号は現在, 発音区別記号のような扱いであって, 単独の文字とは考えられていない。

また, 帯気音についても, デーヴァナーガリー文字では独立した文字がある (अ ख) ので, 独立した扱いができそうだが, ペルシア=アラビア文字の場合, chor (چھوڑ) と cor (چور), unhon (انھوں) と unon (انوں) は, 表記では ch や nh を独立した 2 文字 (چھ نھ) で表すにもかかわらず, 韻律では同じである。このように「インド式 sabuk-i Hindi」の韻律が決定されており, これとの矛盾が生まれると, 文学創作の中心である詩作において混乱が生じかねない。同様に, ānkh (目) の場合, 韻律では aakh と同じになる。すなわち a-an-kh (ا+ان+کھ) と a-a-kh (کھ+ا+ا) が同じことから, 韻律上, a と an は同じである。インシャーはこれを理由に, an という音を独立した文字と数えた。インシャーの主張は在来の音をペルシア=アラビア文字の体系と韻律に取り込もうとした点で, 先述のラースィフ同様, 重要である。

2 ギルクリストによる正書法

インシャーがウルドゥー語の文字数に関して議論していたまさに同時期, カルカッタでは

62) たとえば, jāngal の n も鼻音化しており, 韻律上 n は単独文字として計算されない。

63) is, us は, اوس ایس といった書き方になる。このような例は, 写本において, کیدھر kidhar など枚挙に暇がない。

イギリス人ギルクリストによって編纂された文法書において、ウルドゥー語の正書法の確定が進められた。

現在のウルドゥー語の文字数は、20世紀初めに、辞書編纂者として知られる John T. Platts による *A Grammar of the Hindustani or Urdu Language* (1909年) が公刊された頃 35 文字に確定したが、これ以前、ウルドゥー語の文字数は 35 以上の数とされていた。たとえばギルクリストは 1798 年の最初の文法書 [OL: xi] では母音を 11 (うち長母音 7, 短母音 4), 子音数を 22 としているが、1808 年の [SEI: 3] において、ヒンドゥスターニー語の母音を 11, 子音を 48 であるとしている。この場合、長母音および帯気音を独立した文字として数えている。だがその 2 年後の 1810 年の著書 [HP] では、母音を 13, 子音を 36 としており、ギルクリスト自身が、音の数の確定に紆余曲折を経ていることがわかる⁶⁴⁾。

HP [1796? (1810 rep)] の *The Hindee-Roman Orthoepigraphical Alphabet* では、音の総数は 72 だが、1819 年にカレッジから刊行された年報での音の総数は 78 に増えている [ACF: iv]。しかもその差は、'a, 'i, 'u, 'o, 'ue, 'uo (長母音), sh など増えているものもあれば、w など減っているものもある。ローマ字による表記方法においては、a を u, 'a を ū, yē の上に alif をつけた a ʾ を ā, ʒwād を z としたり、帯気音の場合に、b, hu, ch, hu, d, hu など子音と h の文字の間に小さな縦線を入れる [OL: xii] などの工夫が見られる。だが、ghain を gh のまま [HP] か、gh と下線を引く [OL: xii] か、あるいはそり舌音を ʈ, ɖ, ɽ とする [HP] かイタリック t, d, r と表記する (tootna [OL: 7]) など、10 年ほどの短期間に、表記に差が多く見られる。母音を区別する hamza や zabar, zer, pesh, bisarg などについては、「文字というよりも発音区別記号、あるいは印である」[HP: xiii] としながらも、これらを独立した音として数えている場合も見られる⁶⁵⁾。

「ローマ字の下にドットをつけることで、われわれは [発音上の] 混乱を避けることができる… (中略)…学習者にとって楽になるように、ローマ字の下にドットを 1 つ, 2 つ, 3 つとつけることにしたが、3 つのドットは混乱を生じかねないので、1 本のラインを引くことにした。ペルシア [=アラビア] 文字 18 番目は ʒ となり、20 番目は ʒ とする。また 11 番目は ʒ とする。[このような作業により、] ローマ字とナーガリー文字は以前に比べ、さらに互いに差がなくなった (the nagree and Roman characters are now more on a par with each other than they ever were before)」[HP: xiii]。

64) ギルクリストは 1810 年版の序文において、「私の以前の著作を参照していたヒンドゥスターニー語の学生にとって、ヒンディー・ローマ字体系 (Hindee-Roman system) は、現在の版ほどに正確ではなかった」[HP: x] と記しているが、これは 19 世紀初めの時点で、ヒンドゥスターニー語の文字確定が途上にあったことを示している。

65) この他にも、'ain の場合は、デーヴァナーガリー文字の a, i, u の下に点を打つ、長母音 i の場合は、ペルシア=アラビア文字の ye の下に横並びの点 2 つを打つ、o の場合は wā'o の上に白丸を打つ、ao の場合は wā'o の上に逆の半円 (◌) を打つ、q, ḳh, ghain, zer, ʒo' e, zhe の場合、ナーガリー文字の k, kh, g, j の下に点を打つなどの転写が行われた。

記述文法の当事者だったギルクリストら「外国人」にとって、一つの文法の言語に、二つの異なる文字と語彙が存在することは驚きであった。彼はヒンドゥスターニー語に関して、2種類の東洋のアルファベットが用いられるという特殊性を強調している [HP: xi]。その結果、異なる二つの文字表記を比較し、文字体系を確立する作業に至らしめたのであった。ギルクリストは、ナーガリー (Nagree) あるいはデーヴァナーガリー (Deo-nagree) 文字はペルシア文字ほどに有用でない (being less useful than Persian) [OL: 333] としながらも、ペルシア=アラビア文字とデーヴァナーガリー文字のいずれでも表記が可能となるよう正書法確定にとりかかったのである。

ギルクリストは、自身が作成した文字表において、ヒンドゥスターニー語で用いられる音をすべて抽出し、これをいったんローマ字転写で表記した。そのためには、ペルシア=アラビア文字とデーヴァナーガリー文字の両方を並べて比較し、両方に共通する音と、いずれかにしかない音を区別した。

この作業を経て、ローマ字転写されたすべての音を、ペルシア=アラビア文字とデーヴァナーガリー文字の両方で表記したのである。この際、両文字のいずれかにしかない音については、新たな文字表記を確定する必要が出たのだった。彼の複数の著作を比較すれば、ギルクリストによる文字表記開発の過程が見られる。HP では、p, h, th, dh, r, h, t, h, c, hh, k, h, g, h に対応するデーヴァナーガリー文字は記されているが、ペルシア=アラビア文字にはこれがない [HP: 序文]。一方、デーヴァナーガリー文字にあって、ペルシア=アラビア文字にない音のローマ字転写では、そり舌音 t, d, r をそれぞれ \bar{t} , \bar{d} , \bar{r} とした [ACF: iv]。さらに、f, t, s, z, z, kh, gh, q といったペルシア=アラビア文字に対し、デーヴァナーガリー文字では、従来のデーヴァナーガリー文字にドットなど発音区別符号 (diacritical mark) を付すことで対応している。

ローマ字に発音区別符号をつけることでヒンドゥスターニー語の転写および正書法の可能性を見出したギルクリストは、それまで地域や書家によって文字に差があったペルシア=アラビア文字の正書法を提示した。彼はペルシア=アラビア文字におけるドットの効用⁶⁶⁾を述べ、これを援用してデーヴァナーガリー文字に発音区別符号を付すことで、アラビア語、ペルシア語系の音の表記を可能にしたと記している⁶⁷⁾。さらにギルクリストはウィリアム・ジョーンズが述べた発音区別符号の有用性を紹介し、アジアの異なる言語を正しく表記し、

66) ギルクリストは、ペルシア=アラビア文字が、be ب, te ت, pe پ や fe ف と qaf ق, seen س と sheen ش などの区別がドットの数によって可能となっている点を有用であると述べている [HP: xiv]。

67) Having found the dots so useful in the Persi-Arabic, I have extended them and the dash even a little further, to denote certain Nagree symbols, for which that would otherwise be no parallel in the Persi-Arabic, and vice-versa, when the Nagree seemed defective in some guttural and other sounds peculiar to the Moosulmans, as will be found fully illustrated in the Plate. [HP: xiv]

発音するためには、ローマ字 (Roman characters) のみでは不十分であり、フランス語などのように、ローマ字に発音区別符号をつけることで、ヒンドゥスターニー語の正書法が成立すると主張している [HP: xviii; Raley]⁶⁸⁾。そこで彼は、自身の文法書 [HP] において、自身による正書法 (my Hindee-Roman orthoepigraphical plan) が、いかなる言語をローマ字で表記する上で汎用的であるとし、その表記法の有用性を強調した。彼と同時代の文法書、たとえば Hadley 1796 は、表紙にペルシア語の正書法に則ったと記し、すべてローマ字によって表記されているが、その発音は正確なものではなく、「インド人に伝わればいい」といった便宜的なもので、発音をカタカナで書くかのごとき作業であった⁶⁹⁾。これに対しギルクリストは、発音や文字表記により正確さを求め、その正書法の統一を行ったのである⁷⁰⁾。

たとえば、ペルシア=アラビア文字にある z 音をデーヴァナーガリー文字で表記するために、j の文字 ज の下に発音区別符号のドットをつけること ज़ で、z 音の表記を可能としたのである⁷¹⁾。これらの解説は、ギルクリストの正書法がジョーンズから引き継がれていることを指している。

ギルクリストの正書法が最も顕著に現れたのは、1803年にカレッジから刊行された *Khīrad Afrōz* と、教科書 *The Hindee Story Teller* であろう。前者は寓話集 *Kalīla o Dimna* を Ḥafīz al-Dīn Aḥmad がギルクリストの指示でペルシア語からヒンドゥスターニー語に訳したもの⁷²⁾だが、同書の巻末には、ギルクリストによる正書法が掲載され、「総ての刊行物はギルクリストの [考案した]、読者に簡便な文字表記に基づいている、それは、この正書法でないものはインドの人でも読みにくいからである、特に長母音の i と ye の違いなどは、単語の意味などを熟知していないと区別ができないにもかかわらず、表記は同じなため、結果として正しく読めないことになってしまうのである…(中略)…そこでギルクリスト氏が考案 (ijād) した正書法をここに掲載したのである」[Ḥusain 1965: 287] と紹介

68) 18, 19世紀の南アジアの諸言語に関する刊行物の背景については、[Ahmad 1985] が詳しいが、刊行時の活字の問題、特に発音区別符号については言及されていない。

69) 子音の紹介も guttural など5音のみの紹介にとどまっており、そり舌音の区別はない。また文法においても、コピュラは主語の性や数に関係なく総て同じ (例: Hum hooa, Hum loge hooa, Toom hooa, Toom loge hooa, Ooah hooa, Ooah loge hooa; Hum t,hau, Hum loge t,hau, Toom t,hau, Toom loge t,hau, Ooah t,hau, ooah loge t,hau など) [Hadley 1796: 16-20]。正書法については、ペルシア語正書法に則っていると表紙に記しているものの、不正確さが目立つ。

70) ただしギルクリストの文法にも、彼自身がヒンドゥスターニー語を学んだ東部の方言の影響があると指摘されている [Kidwai 1972: 100]。

71) 原文 [A]s the simplest way of discriminating one from the other, for, in fact, the Hindoos have no such sound as z in their language; we are consequently obliged to make j with a dot below answer that purpose [HP: xvi]

72) カレッジの年次報告書には、寓話はサンスクリット起源で、これがアクバル帝下のアブル・ファズル AboolFuzl (Abu al-Faḥl) によって Uyar Danish ('Ayār Dānish) の題名でペルシア語に翻訳され、これがヒンドゥスターニー語に翻訳されたとある [ACF: 26]。

されている⁷³⁾。

さらに同文には、「ある語句 (kalma) の文字が、母音文字 (ḥarf 'illat) や子音記号 (sākin) 以外に、短母音 a を表す zabar の符号 (fatḥah) があつたり、子音記号を除いた場合は、常に短母音 a のついた文字 (maftuh) や子音の発音となるだろう (例: hawā)。しかし、母音記号 (fatḥah) が必ずついている場合は、[その発音と] なるだろう (例: hu'ā)。[例えば] もし短母音 u を表す pesh の符号 (maẓmum), 短母音 i を表す zer の記号 (maskūr) が必要な場合は、母音 i の記号 (nishān kasre: zer) や母音 u の記号 (ẓamme: pesh) が付される。そして何らかの文字によって子音を表すことに関しては、なんら符号を定めていない」[Husain 1965: 288] とか、wā'o や yē (yā'e) の表記について、語中で u や i の音を表す場合 (wā'o ma'rūf; yā'e ma'rūf) は特に符号をつけませんが、yē について、語中で o, e と発音する場合 (wā'o majhūl; yā'e majhūl) は文字の上にマルをつける [Husain 1965: 288-289], あるいはそり舌音については文字の上に横棒 (khaṭ 'arẓī) を引くなどを紹介している。

ギルクリストによる上記正書法はカレッジからの刊行物に反映されており、たとえば [Hasan 1805] では لگا ہر جگہ بادلہ اؤرزری [Hasan 1805: 29], また [Mir 1811] では سئ [Mir 1811: 391], أس [Mir 1811: 696] などの例がある⁷⁴⁾。

The Hindee Story Teller はインド在来の小話を、ローマ字転写、ペルシア=アラビア文字、デーヴァナーガリー文字で記したものである。転写と正字法について、まずペルシア=アラビア文字 37 文字 (zabar, zer, hamza 等を含む) を例示し、その後デーヴァナーガリー文字 50 を示している。さらに、Hindoostanee Alphabets Reformed, or an Abstract Comparative Sketch of the Hinduwee, Farsee, Urbee (Arabi) として、ペルシア=アラビアとデーヴァナーガリー両文字で、お互いがない音を補完しあう形で、計 60 文字を紹介している。これに続いて、短母音や 'ain の文字などを独立文字として加算した、ローマ字転写による 70 の音を紹介し、この音をペルシア=アラビア、デーヴァナーガリー両文字でそれぞれ紹介する念の入れようである。ここには、ギルクリストの音の転写に対する執着が伺える⁷⁵⁾が、学習者側では混乱を招きかねない。しかし、当時はギルクリスト以外に、ヒン

73) [Khān 1992: 84] はこの文章がサアディーのペルシア詩 *Gulistān* のヒンドゥスターニー語訳である *Bāgh-e Urdū* (1802 年) に掲載されたとして、一部のみを引用している。*Bāgh-e Urdū* のカレッジ版の巻末を筆者は未見だが、もしこれが採録されていれば、ギルクリストの正書法が当時の複数の教材で紹介されていたと考えられる。

74) なお Hasan 1805 に比べて Mir 1811 では符号が明らかに少ない。ギルクリストのイギリス帰国が 1804 年であることと符号の簡略化に関係があるかは今後考察を進めなければならない。

75) ギルクリストは、正しい発音を主張するとともに、ローマ字による現地語の表記法に則った正しい地名表記も提唱した。彼は文法書の最後に、ヨーロッパ人が勝手に決めた固有名詞などの綴

ドゥスターニー正書法を制定する人物はいなかった。ギルクリストは結局1804年にイギリスへ帰国したが、1819年に刊行されたカレッジの年次報告書には、ギルクリストの正書法が受け継がれている。19世紀初めにおいて、ヒンドゥスターニー語教育で主導的立場にあったギルクリストが、文法書や辞書、教科書を活字で出版する上で正書法を提示したことは、その後のヒンドゥスターニー語記述文法およびペルシア＝アラビア文字、デーヴァナーガリー文字の表記に多大な影響を与えたのだった⁷⁶⁾。そしてこのことは、ヒンドゥスターニー語や、ウルドゥー語、ヒンディー語の転写や正書法確立が、ギルクリストという個人に大きく委ねられていたことをも指している。

口語であるヒンドゥスターニー語の文字について、ラースィフやインシャーらインド人による議論は、ペルシア＝アラビア文字で表記することを前提とし、その文字が持つ韻律の体系で文字数を数えようとした。その意味では、インド在来の音という、ペルシア＝アラビア文字にとって異質なものを認識しながらも、その在来の音をペルシア＝アラビア文字の体系に取り込もうとするものであった。インシャーの『ケートキー姫物語』も、技巧的であるといっても、ペルシア文字で在来の音を書くという点ではラースィフの提唱に通じている。一方ギルクリストは、前述の通り、デーヴァナーガリー文字に対し、ペルシア＝アラビア文字の有効性を説きながらも、在来の音をペルシア＝アラビア文字で、またアラビア語、ペルシア語の音をデーヴァナーガリー文字で書こうという双方向性を持っていた。互いに存在しない音をいかに文字化するかという点に腐心が見られる。このような作業がギルクリストというイギリス人の個人によって推進され、両方の文字体系を比較したことが、かえってその文字体系の持つ文化的側面、すなわち宗教文化面を浮き彫りにしたといえる。

かくして、ヒンドゥスターニー語の音素および文字表記の標準化は18世紀末に始まり、フォート・ウィリアム・カレッジ設立とほぼ時期を同じくして19世紀初めに一定の基準が成立した。ただしその後も若干の変更は続けられ、19世紀後半のプラッツの辞書や文法書が刊行される頃に、現在とほぼ同じ文字表記となった⁷⁷⁾。

り271例について、転写法に応じた修正案を挙げている（例：Arabia（正Urub）；Baghdad（Bughdad）；Benares（Bunarus）；Bengal（Bungula）；Bombay（Bumby, Mumby）；Cabul（Kabool）；Cairo（Qahra）；Calcutta（Kulkutta）；China（Cheen）；Egypt（Misr）, India（Hind）；Indostān（Hindoostān）；Madras（Mundraj, Mudras, Cheenaputum）など）[SEI: 183-189]。同様に、インド人による英語の間違った発音（例：attention（誤：tel-chun）；captain（kuptan）；general（junrel）；office（afis）；report（puput）など）[SEI: 179-182] 130例のリストも紹介している。

76) 1851年にDuncan Forbesが編纂したForbes 1851はミール・アンマンの『四人の托鉢僧の物語』の再版だが、ここでもギルクリストの表記が踏襲されている。

77) それでもなお、そり舌音の表記は、現在のṭo'eの形をつけるのではなく、4つの点、あるいは2つの点の上に横線をつけるものであった。この表記法は、20世紀はじめまで活字出版物で続いた[Inshā]。

結 語

小論は、特に19世紀初めまでの、特にギルクリストによる正書法確定の経緯を検討した。これに続く時代の正書法に関する議論については、今後明らかにしたい。

19世紀初め、インド、特に北インドの社会は、文語がペルシア語からウルドゥー語への移行期にあった。ペルシア詩を書いていた北インドの文人も、ウルドゥー詩を書き始めてほぼ1世紀を経ている。

同時にこの時代は、イギリスが統治者としての自覚を強めた時期であり、現代語（口語）習得の社会的要請が強まると、現地語記述文法の必要性が高まった。アジア協会を中心にサンスクリット語やペルシア語文学の古典研究は進んでいたものの、実用的な現代口語の記述文法作業は端緒がたったばかりであった。会話文を重要視した記述文法は、「正しい発音」、「正しい表記」を主張するギルクリストが中心になって編纂された。彼は音や文字表記に対する執着を示し、幾度も修正を重ねながら、正字法の確立に努めた。その過程で、北インドの「共通語」である口語を、ヒンドゥスターニー語と呼ぶことにした。そしてこの口語には、ペルシア＝アラビア文字とデーヴァナーガリー文字の2種があるものの、その正書法が確立しておらず、両文字は、アラビア、ペルシア語彙や在来の語彙を表記する上で、お互いに表記できない文字があるという問題に突き当たった。過去、インド人による転写の試みはあったが、彼はウィリアム・ジョーンズらが提唱していた音声区別記号を利用し、両文字に発音区別記号のドットなど、ローマ字の転写法を援用することで相互補完的に新たな文字を作り、正書法を確立させようとした。彼の正書法は修正が繰り返されたものの、その多くの点で、後のウルドゥー語、ヒンディー語の正書法に活かされた。この作業には、それまでの書家各自による手書きから、外国語教育の教材として活字化する作業という、文字の規格化、すなわちローマ字ですべての言語を記述し、理解できるという発想も大きく影響していた。

ギルクリストが口語の「音」の転写に固執した19世紀初めは、イギリス人にとって、現地語の実践的な会話が要求された時代であった。共通語たるヒンドゥスターニー語の発音を追求する中で、ペルシア語、アラビア語にしかない kh, q, z などの音を正しく発音する、「洗練された口語」、すなわち「ウルドゥーの言葉」の存在が確認された。詩人インシャーも書いたように、デリーの宮廷を中心としたペルシア語文化に通じた人々に支えられたこの口語は、「ウルドゥー語」という言語名で知られるようになった。この言語が「ペルシア語文化を支えるムスリム王朝の、洗練された発音の口語」と定義されることで、ウルドゥー語がムスリム文化の産物であるとの認識が生まれた。すなわち、言葉の持つ「音」の違いが言語的、宗教的アイデンティティを際立たせたのである。これが、イギリス人による文法執筆、特に正書法確立においてなされたのである。他方、ペルシア語やアラビア語の発音ができない言語については、ヒンドゥー教と関連付けられ、「ヒンディー語」と呼ばれるようになって

た。

他方、「1つの口語の2種の転写」は、それまで書家の裁量に委ねられていた「表記できない文字」の正書法をもたらした。そして、ペルシア＝アラビア文字とデーヴァナーガリー文字それぞれが記してきた独自の文学伝統の存在を意識化させ、アラビア、ペルシア、トルコ系の語彙と、サンスクリット系の語彙の存在が浮き彫りとなった。語彙による言語の宗教的アイデンティティの主張もまた、正書法の確立の過程においてイギリスによって強調された。

「共通語」としてのヒンドゥスターニー語の記述文法成立については、ラースィフやインシャーなどインドの文人の提案もなされたが、急速に発展したのは、19世紀初めのイギリスによるインドでの覇権確立を背景とした。それまで実用的な会話集しか蓄積がなかったがために、極めて限られた語学教育者、すなわちギルクリスト個人の見解が、ヒンドゥスターニー語記述文法編纂に大きな影響を及ぼしたことは、致し方なかったのであった。

[追記] 本稿は、平成18年度大学教育の国際化推進プログラム（海外先進研究実践支援）「ウルドゥー語標準化における力学関係の研究（18－研－189）」および平成19年度科学研究費プロジェクト「多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として」の成果です。執筆に際し、ラクシュミー・ダール・マラーヴィヤー先生（Dr. Lakshmi Dhār Mālavīya）、ムハンマド・ファハルル・ハク・ヌーリー先生（Dr. Muḥammad Fakhar al-Ḥaq Nūrī）、ムーヌッディーン・アキール先生（Dr. Mu'in al-Dīn 'Aqīl）、アーリフ・ナウシャーヒー先生（Dr. 'Ārif Naushāhi）、タバッスム・カーシュミーリー先生（Dr. Tabassum Kāshmirī）、さらに畏友ザーヒド・ムニール・アーミル氏（Dr. Zāhid Munir 'Āmir）およびスヘイル・アッバース氏（Dr. Suhail 'Abbās）より貴重なご助言を頂きました。ここにご芳名を記して御礼申し上げます。

参考文献

大英図書館所蔵

ACF: Wellesley, Marquis, arranged and published by Thomas Roebuck, *The Annuals of the College of Fort William, from the Period of Its Foundation*, Calcutta: the Hindoostanee Press [IOR: 731, f. 12/ V 371]

CFW: College of Fort William, (1805) “*The College of Fort William in Bengal*”, London, T. Cadell and W. Davis. [IOR 731, 1, 13/ V 7727]

DNB: Sir Leslie Stephan & Sir Sidney Lee (ed.) (1822) *The Dictionary of National Biography*, VII, (1922, rep.) OUP.

EIC: *East India College, Haileybury, 1806–1858, Records and Records of Other Institutions*,

- 1749–1925. London : Her Majesty's Stationary Office. [OIOC J/ 1–4 ; K 1–3]
- HP : Gilchrist, John Borthwick, (1801) *Hindoostanee Philology : Comprising a Dictionary, English and Hindoostanee, also Hindoostanee and English ; with a Grammatical Introduction*, Edinburgh : Walker and Greig, [OIOC : V 4566]
- OL : Gilchrist, John Borthwick (1798) *The Oriental Linguist*, Calcutta : Ferris and Greenway. [IOR 1502/ 371/ 1–2]
- PVE : (1806) *A Preliminary View of the Establishment of the Honourable East-India Company in Hertfordshire for the Education of Young Persons Appointed to the Civil Service in India*. [OIOC/J/1/ 21, 44–63, mss noted by John Borthwick Gilchrist]
- SHE : Gilchrist, John Borthwick (1808) *The Stranger's East India Guide to the Hindoostanee ; Or Grand Popular Language of India (Improperly Called Moors)*, London. [OIOC : T 7193]
- TH : *Tofat al-Hind* [OIOC : ethe 2442, 335 f]
- 'Abbās, Suhail (ed.) Amman, Mir, (2006) *Bāgh o Bahār*, Multan : Beacon Buks.
- Afsos, Mir Sher 'Ali (1810) *Dīwān-e Afsos*, [OIOC i. o. Islamic 2575]
- Ahmad, Nazir (1985) *Oriental Presses in the World*, Lahore : Qadira Book Traders.
- Amman, Mir (1992) *Bāgh o Bahār*, (1851 rep ed) Lahore : Sang-e Meel Publications.
- Apte, VamanShivaram (1957) *The Practical Sanskrit-English Dictionary* (1986 rep. ed.) Kyoto Rinsen Book Co.
- Aqeel, Moinuddin (1994) Language and Nationalism, Hindi, a Cause in the Emergence of Separatism in British India 『東京外国語大学論集』49, 199–208.
- 'Askari, Faiyāz (1995) Qādrī Bārī [National Library of Pakistan 所蔵, 文書 No. 64]
- 'Azlat, 'Abd al-Walī (1759) *Rāg Mālā* [OIOC i. o. islamic 2380]
- Bowen, John (1955) 'The East India Company's Education of its Own Servants', *Journal of the Royal Asiatic Society*.
- Brass, Paul R. (1974) *Language, Religion and Politics in North India*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Burke, Peter (1995) Introduction, (ed. by Burke, Peter and Porter, Roy) *Languages & Jargons Contributions to A Social History of Language*, London : Polity Press.
- Cughtā'i, Ikrām (1966) Urdū Ba-ma'ni Zabān ke Muta'liq Na'i Taḥqīq, *Urdū Nāma* 26.
- Das, Sisir Kumar (1978) *Sahibs and Munshis : An Account of the College of Fort William*, Calcutta.
- Dihlavī, Maulānā Saiyid Aḥmad (1901) *Farhang-e Āṣifiya*, 1–4, (1987 rep. ed.) Lahore : Urdu Science Board.
- Forbes, Duncan (ed.) Mir Amman (1851) *Bāgh o Bahār* (1992 rep. ed.) Lahore : Sang-e Meel Publications.
- Ḡhawāṣī, Shaiḫh Dakhnī (1763) *Qiṣṣa Saif al-Mulūk o Bādī* [National Library of Pakistan 所

蔵, 文書 No. 2]

- Gilchrist, John Borthwick (1803) *The Hindee Story Teller or Entertaining Expositor of the Roman, Persian, and Nagree Characters, Simple and Compound, in Their Application to the Hindoostānee Language, as a Written and Literary Vehicle*. (1806 sec. ed.) Calcutta: Hindoostanee Press.
- Hadley, George (1796) *A Compendious Grammar of the Current Corrupt Dialect of the Jargon of Hindosatn (Commonly Called Moors), with a Vocabulary English and Moors, Moors and English, with References between Words Resembling Each Other in Sound, And Different in Signification, and Literal Translations of the Compounded Words and Circumlocutory Expressions for Attaining the Idiom of the Language. To Which Are Added Familiar Phrases and Dialogues, &C, &C., With Notes Descriptive of Various Customs and Manners of Bengal. For the Use of the Bengal and Bombay Establishments., The Fourth Edition Corrected and Much Enlarged.*, London: J. Sewell.
- Ḥaq, 'Abd-al (ed.) Inshā, Inshā Allāh Khan (1935) *Darya-i Latafat*, (1988 rep. ed.) Karachi: Anjuman Taraqqi Urdu Pakistan.
- (ed.) Mir Taqī Mir (1935), *Nikāt al-Shu'arā* (1979 rep. ed.) Karachi: Anjuman Taraqqi Urdū Pakistān.
- Grierson, G. A. (1921) *Linguistic Survey of India 6-1, Indo-Aryan Family (Central Group) Punjabi-Urdu-Hindostani/ Western Hindi* (? rep. ed.) Lahore: Accurate Printers.
- Ḥusain, Mushtāq (ed.) Ḥafīz al-Dīn Aḥmad (1965) *Khīrad Afrōz*, Lahore: Majlis Taraqqi Adab.
- Husan, Meer (1805) *Sih-r-ool-Buyan or Masnuwee of Meer Husun, Being a History of the Prince BeNuzeer, in Hindoostanee Verse*, Calcutta, The College of Fort William.
- Inshā, Inshā Allāh Khān, Pandit Braj Mohan Datātriyā Kaifi (tr.) (1935) *Daryā-i Laṭāfat* Karachi: Anjuman Taraqqi Urdū Pakistān.
- (?) *Rānī Ketkī kī Kahānī* 大英図書館所蔵写本
- Jain, Giyān Cand & Ja'far, Saiyida (1998) *Tārikh Adab-e Urdū 1700 Tak*, 1, New Delhi: Qawmī Kānsal barā'e Farogh-e Urdū Zabān.
- Kāshmirī, Tabassum (2003) *Urdū Adab kī Tārikh*, Lahore: Sang-e Meel Publications.
- King, Christopher (1994) *One Language, Two Scripts: The Hindi Movement in Nineteenth Century North India*, Delhi: OUP.
- Quraishi, Salim al-Din (ed.) Khan, Sir Syed Ahmed (1873) *Cause of The Indian Revolt; Three Essays*, (1997 rep. ed.) Lahore: Sang-e Meel Publications.
- Khān, Rashīd Ḥasan (ed.) Mir Amman Dihlavi (1992) *Bāgh o Bahār* Lahore: Nuqūsh.
- Kidwai, Sadiq-ur-Rahman, 1972, *Gilchrist and the Language of Hindoostan*, New Delhi: Rachna Prakashan.
- Majeed, Javed, 1995, *The Jargon of Indostan: An Exploration of Jargon in Urdu and East*

- India Company English, *Languages & Jargons Contributions to A Social History of Language* (ed. Burke, Peter and Porter, Roy), London : Polity Press.
- Meer, Mohummud Tuqee (1811) *Kooliyat Meer Tuqee, The Poems of Meer Mohummud Tuqee, The Whole of His Numerous Celebrated Compositions in the Oordoo, or Polished Language of Hindoostan*, Calcutta, Collage of Fort William.
- Naushāhī, ‘Ārif (2004) *Urdū Ḥaruf Tahjī ke Imla ke Qawā'id par Ek Qadīm Fārsī Tahrīr*, Dībāca-i Kāristān, *Bāziyāft* 4, 97 – 118.
- Nishāṭī, Ibn (1650) *Phulban* [OIOC i. o. Islamic 14]
- Nuṣratī (1785) *Gulishan-e 'Ishq* [OIOC u- 2621, i. o. islamic 2621]
- Platts, John, T. (1884) *A Dictionary of Urdu, Classical Hindi and English*, (1990 rep. ed.) Lahore: Sang-e Meel Publications.
- Platts, John, T. (1909 fifth impression) *A Grammar of the Hindustani, Urdu Language*, (first ed. 1874, 2002 rep. ed.) Lahore : Sang-e Meel Publications.
- Rahman, Tariq (2004) *Language and Education, selected Documents (1780 – 2003)*, Islamabad : *Quaid-i-Azam University*.
- Rai, Amrit (1984) *A House Divided*, New Delhi : OUP.
- Raley, Rita (?) “A Teleology of Letters ; or, From a “Common Source to a Common Language [1]” (abstract), Romantic Circles Praxis Series, The Containment and Re-Development of English India.
- Raḥīa Nūr Muḥammad (1985) *Urdū Zabān aur Adab men Mustashirqīn kī 'Ilmī Khidmāt kā Tahqīqī o Tanqīdī Jā'iza*, Lahore : Maktaba *Khīyābān Adab*.
- Robinson, Francis (1974) *Separatism among Indian Muslims, The Politics of the United Provinces' Muslims 1860-1923*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Sarhindī, Wārith (1990) *'Ilmī Lughat (Jāme')*, Lahore : 'Ilmī Kutb *Khāna*.
- Sawdā, Mirzā Muḥammad Rafī (1825) *Kulliyāt-e Sawdā*, Calcutta : College of Fort William [OIOC i. o. islamic 353]
- Schulzino (Schultz), Benjamin (1977) *A Grammar of Hindoostani Language*, (first ed. 1741) Lahore : Majlis Taraqqī Adab.
- Ṣiddiqī, Muḥammad ‘Atīq (1960) *Gillrist aur Us kā 'Ahd*, Aligarh : Anjuman Taraqqī Urdu.
- Shackle, C. & Snell, R (1990) *Hindi and Urdu Since 1800 A Common Reader*, New Delhi : Heritage Publishers.
- Sikka, R. P. (1984) *The Civil Service in India*, New Delhi : Uppal Publishing House.
- Steingass, F. (1892) *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, (1981 rep. ed.) Lahore : Sang-e Meel Publications.
- Soz, Saiyid Muḥammad Mir (1801) *Dīwān-e Soz* [i. o. islamic 2872]
- Tahsīn, Muḥammad Ḥusain Aṭā *Khān*, (1826) *Nau Tarz-e Muraṣṣa*, [OIOC U 52, Foll 132]
- ‘Ubaida Begam (1983) *Fort Wiliam Kālej kī Adabī Khidmāt*, Lucknow : Nusrat Publishers.

- Varma, Dhirendra (1948) 'Khaṛī Bolī', *Hindī Sāhitya Kosh* 1, Banaras, 249 – 251
- Yamane, So (2000) Lamentation Dedicated to the Declining Capital: Urdu Poetry During the Late Mughal Period, 『南アジア研究』 12, 50 – 72.
- Wali, Muḥammad (1732) *Diwān-e Walī* [OIOC i. o. islamic 3127]
- Yaqīn, 'Ināyat Allāh Khān (1780) *Diwān-e Yaqīn* [i. o. islamic 2146]
- Yule, Henry & Burnell A. C. (1986) *Hobson-Jobson A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive.* (first ed. 1886) Delhi: Rupa.
- 粟屋利江 (1998) 『イギリス支配とインド社会』世界史リブレット 38, 山川出版社.
- 家島彦一 (訳注) (1999) イブン・バットゥータ, イブン・ジュザイイ編『大旅行記 4』平凡社東洋文庫.
- 井上英二 (1933) 「歐人の^{ヒンドスタン}印度語研究に就て」『印度洋』第十号 大阪外国語学校 アーリヤ学会 32 – 40.
- 蒲生礼一 (訳注) 麻田豊 (補) (1990) 『ミール・アンマン 四人の托鉢僧の物語』平凡社東洋文庫.
- 古賀勝郎 (1977) 「Daryā-e-Laṭāfat に記録された諺について」『印度民俗研究』 4 大阪外国語大学インド・パキスタン語研究室 17 – 63.
- 近藤 治 (2003) 『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会.
- 近藤 治 (2006) 『東洋人のインド観』汲古書院.
- 長島 弘 (1986) 『訳詞長短話』のモウル語について —— 近世日本におけるインド認識の一側面 —— 『長崎県立国際経済大学論集』 19 – 4.
- 藤井 毅 (2002) 「一 近現代インドの言語社会史」『現代南アジア 5 社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会 63 – 98.
- 松村耕光 (訳注) (1996) 『ミール狂恋詩集』平凡社東洋文庫.
- 間野英二 (訳注) (1998) 『ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・パーブル パーブル・ナーマ』松香堂.
- 山根 聡 (2000) 「デリーへの哀悼詩」『世界文学』 5 (大阪外国語大学世界文学研究会) 279 – 358.
- 山根 聡 (2001) 「除法の魔術 (一)」『世界文学』 6 (大阪外国語大学世界文学研究会) 243 – 284.

(大阪外国語大学外国語学部)